
Full Moon

雨月 照琵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F U L L M O O n

【Z-コード】

Z8520C

【作者名】

雨月 照麗

【あらすじ】

世界のために・・・心優しい少女・ルチアはそう願い、旅に出る・・・たとえその先にどんな未来がまつていようと。世界のため、愛する人のためルチアはみんなの幸せを祈った・・・

青白く月が輝いている

少女の美しいプラチナブロンドの髪が風に揺れている、月明かりの
せいか顔色が悪い

黒いビロードのような髪を持つた少年が少女を抱き寄せる
「絶対に俺が取り戻してみせるから・・・」

耳元でつぶやいた声は少女には聞こえない・・・

なぜ人は憎しみあい傷つき、それでも愛すのでしょうか・・・

「アイル！起きて！」

少女はすこし癖つ毛のプラチナブロンドの長い髪をゆらしながら黒
い髪の少年を起こそうとしている

「ル・・・チア？今日は休みだろ？もつ少し・・・」

ルチアと呼ばれた少女は泣きそうになる

「え？ダメだよう・・・ちゃんと起きてえ・・・」

アイル・エール・フェンデは実は起きていてからかっている

「アイルう・・・きやつ」

アイルはルチア・フォン・エルウッドをベッドへ腕をひきよせ倒した
彼女の頬にふれる

「そんなに起きてほしい？」

「うん・・・だって今日は大司教様とお約束があるもの・・・」

ふつとアイルは意地悪っぽく笑い、ルチアを抱き寄せた

「アイル？」

「じゃあ、お目覚めのキスしてくれよ。お前のファーストキスをさ・

・・・

ルチアは顔を赤らめ、瞳を潤ませた

「アイルの意地悪！ぐすつ・・・ひどい・・・

「あははは、ごめんごめん冗談冗談・・・」

アイルはふつと笑った

「このとき俺はいつまでもこんな日々が続くと思っていた・・・、ずっとルチアがそばにいてくれると・・・

「あつ遊んでる場合じゃないよー早く起きてしたくして!」

アイルは起き上がり頭を搔く

「はいはい・・・、ルチア」

ルチアは部屋を出て行こうとした足を止め振り返った

「なあに？」

「おはよう」

ルチアは微笑んだ

「おはよう、アイル」

教会へと行くとすでに大司教と数人の司祭が待っている
「遅くなってしまってごめんなさい」

ルチアは深く礼をする

「ルチア、いいんですよ。他の仕事があつただけですから・・・。
それよりもあの話引き受けてくれますね？」

「あ、はい。それが世界の平和のためになるのなら・・・。

「では、私は儀式の準備があるので」

ルチアとアイルは教会からでた

この世界にはある風習があつた。

それは、一人の少女が世界の悪を浄化するために旅に出、そして女神と契約し世界を浄化するのである

胡散臭いけどな

アイルはため息をつきルチアを見る

この世界には三つの人種がある

一つはルチアのように人間・・・

二つ目はアイルのような獣人・・・こちらは体に特徴があり瞳が深い紫の色で、自分の意思で獣に変身することができる。アイルの場合普通の狼の数倍はある黒い狼だ

そして・・・三つ目は天人・・・女神をはじめとする天使などのことをさした

どの人種も魔法を使うことができ、その力は誕生するときに与えられた

ルチアは風、水、癒しの力、そして光の力

アイルは火、雷、大地の力、そしてルチアとは対称的な闇の力

力の少ない・・・悪く言えば才能のない人もいる

ルチアとアイルのようにつかさどる力の多い人は世界から大切にされた

「ルチア・・・本当に行くのか？」

「うん、それが世界のためになるのならね・・・」

「なあ、俺もついていいか?やっぱ心配だし・・・」

ルチアは笑顔で振り向いた

「本当?! ありがとう!」

アイルに抱きつく

「ルチア？今日こそ俺の気持ち聞いてくれるよな？」
顔を胸にうずめながらルチアは頬を赤らめる

「う・・・ん」

気付いてるかも知れない思いを改めて伝えるって変だな・・・

「好きだ・・・」

「うん、私も・・・」

アイルはそのままルチアのあごを優しく持ち上げキスをした
このときが止まればいいのに・・・
アイルはそう願つた・・・

雲ひとつない春の晴れた空、満開になつた美しい白い花が儀式を飾るようだつた

教会では女神像の前でルチアが祈りをささげている

「私は、女神の代わりとなつて世界を旅し、世を浄化し平和にすると誓います・・・」

誓いの言葉を言い終わると、彼女の周りを光が包み胸元に印が一瞬ひかる

「では、これから。そのたびへ出てもらう・・・。アイル！」

アイルは前に出る

「はい・・・」

「そして、レイ！」

深い緑色の髪と瞳を持つた少年。レイ・ロト・ルルスが前に出でる

「はい」

「ともに同行し巫女を出助け給え」

儀式が終わり3人は外に出た

「えつと、アイル、レイこれからよろしくね」

ルチアは微笑んだ。

レイは教会と学園が推薦した少年だ。

レイは短い髪を揺らし笑う

「よろしく！」

レイのつかさどる力は三つ・・・、才能のあるほうだ

「アイルもあいさつして・・・」

アイルはぶつきらぼうにレイと握手をする

「よろしく・・・・」

多くの人々に声援をもらしながら、街を出た

「確か、全部で四つの神殿で祈りをささげるんだつたよな？」

アイルがルチアにたずねる、ルチアはうなずく

「そうだよ、そして一番最後に女神様が眠っているって言つ神殿で契約するの」

レイが感心した

「へえー、ちゃんと勉強したんだあ。えらいなあ」「行くと決めていたのだからそれくらい当たり前さ・・・」

イルはムツとした様子で答えた。そんな二人をみてルチアはおろおろしている

「け、けんかはダメだよ?これから長い間一緒に旅するんだから仲良くしよう?」

イルとレイは前からあまり仲が良くない
だから反対したのに・・・大司教様のバカ・・・

数日前、ルチアは大司教に呼ばれていた

『何のようですか?』

大司教は振り向いた

『ああ、よく来てくれましたね』

『いえ、別に平氣ですけど・・・』

『実は、旅に出るメンバーのことで話しがあって・・・』

ルチアは首を傾げる

『メンバー・・・ですか?』

ええと大司教はうなずく

『イルの腕を信用していいわけではありませんが、護衛が一人では心配だと思つて・・・』

『なんだ、そんなことですか』

それでと大司教は言いかけ口を閉じる

『大司教様?』

『イルとあまり仲が良くないのは知つてゐるんだが・・・力が

使えるのがそいつしかいないのでですよ・・・』

ルチアは驚きとも呆れとも複雑な表情をした

『まさかレイですか?』

『そいつしか適任なのがいなくて・・・』

『え！？そんなあ、私一人での二人はまとめられません！大司教様もよくご存知でしょう？』

大司教様と部屋の外から呼ばれる声がした
『ま、まあ・・・私はこれで、仕事があるんでね・・・』
『ちよつ・・・、大司教様！』

ルチアはもう一度二人を見てため息をついた

「ルチア？どうした？」

いつの間にかイルの顔が目の前にあった

「え？・・・あ、ううん。なんでもないよ！」

「そつか、疲れたりしたら何時でもいいよ」

「そうそう、疲れたたら何時でも俺が抱きかかえてやるぜ」

にっこりとイルはルチアに向かつて微笑み、レイを睨みつける

「ありがとう。二人とも」

いつか、二人が笑いあえるような仲になればいいのに・・・

ルチアの思いは春の心地よい風に流された

「ねえ・・・、レイ?」

レイがルチアのほうに振り返る

「なあに? ルチア・・・」

ルチアは立ち止まり周りを見渡す

「本当にこっちであつてるの?」

生い茂つた木、白昼だといふのに夜のような闇、野鳥の鳴き声
半日も歩いたといふのに目的の街まで着かない

「予定だつたらもうついてるはずなんだけど・・・

「・・・、いつの間にかに道から外れちゃつてた、ごめんね。て

へつ

ルチアとイルは卒倒しそうになつた。イルが口を開く

「お・・・まえが、行つた事あるまかしとけつて言つたから・・・

「うーん、獸道すらなくなつちゃつたねえ」

イルは頭を抱え込む

「あ、ねえ。地図貸して?」

レイはルチアに地図を渡した。ルチアはそれを受け取る

「ふう、コンパスも使えないし・・・。だいぶ道から外れちゃつて
るみたい」

「そんなんのんきに言つてる場合じゃないだろー」

につこりと笑い、地図を地面上におく

「大丈夫だよ?」

ルチアはゆつくりと田を開じる

「風よ・・・、我が意思に答え道をしめしましたまえ・・・

ふわりと風が巻き起こり道を示した

「こつちみたい」

風が示したとおりに歩くと街道へ出た、すっかり田はくれてこる

「これ以上進むのは危険ださう。今日はここで野宿だな」

アイルは荷物をおき、薪を集め始めた

「レイ、お前もだよ・・・。つたく・・・」

「わ、私は？」

「お前は休んでろ・・・。体が丈夫というわけじゃないんだから」
ルチアは俯いたが、すぐに顔を上げ笑顔を作った

「そうだね・・・。心配してくれてありがとう！でも・・・

「でも？」

「少しお散歩してていい？すぐ戻つてくるから」
だめだと言おうとしたアイルをレイがとめた

「いい。行つてきなよ」

「ありがとう！」

ルチアは去つていった

「おい！だめにきまつてるだろ！」

レイの胸ぐらをつかんだ

「ルチアは知らないだらうけど、大司教からあの話しさ聞いてるん
だろう？」

あの話と聞いてアイルはハツとして力を緩めた

「そのうち、あんなかわいいわがままも聞けなくなるんだから・・・

」

「そうだな・・・。わりい・・・」

しばらくの間二人はルチアが戻つてくるまで黙つてしまつた

「ただいま！むこうに川があつたよ。あつちに移動しない？」

ルチアが川のほうを指で示す、最初にレイが口を開いた

「それもそうだな。お手柄だぞ！ルチア！」

レイはニッと笑い親指をたてた

「なつ？アイル。行こうぜ」

「あ・・・ああ、そうだな」

アイルの様子を見てルチアは不信を感じる

「アイル？どうしたの？けんかでもした？」

「え？あ・・・なんでもないよ・・・」

「ふうん」

「ほら！」一人とも行こうぜー。」

夕食を食べ、一息ついた

「あ、ねえ。誰も見ないよう見張つてくれる？」

「「なんで？」」

きれいに一人から返答が帰ってきた

「え？ 水浴びしたいなあと思つて・・・」

「見ない、見張つてるからいいよ」

「ありがとう！ アイル」

ぱしゃっと水に入る音がする

「気持ちいい。髪の毛、ほこりだらけだ」

茂みから物音がした、とつさに前をかくす

「？」

「明かりがあるからまた力モがいるかと思いまや。もつといいもん
がいたなあ」

へへ・・・と笑いながら、野党の男たちが寄つてくる
逃げようとしたときにはもう、囮まれていてくちをふさがれ取り押
さえられた

「んんっ」

「いい体だなあ・・・」

男がルチアの胸に触れようとしたときだつた

「おい、汚い手でルチアに触れるな・・・」

男ののどもとにやつた剣は電気を放つてゐる、そしてひしりからは
レイが弓をひいている

男たちはしたうちをして去つていった

「アイル・・・レイ・・・・、ありがとう」

アイルはそっぽを向いている

「とりあえずなんか着てくれ・・・」

「あ・・・・」

ルチアは顔を真っ赤にした

「魔物じゃなくて良かった・・・」

「ほつとアイルは息をついた

「あいつら、あきらめてくれたかな・・・」

レイがポツリとつぶやく

「さあ、どーだか

「ま、次は容赦しなくていいよな?」

「もちろん。」

ルチアは一人のやり取りを黙つて聞いている

「なんか、ごめん・・・。迷惑かけて・・・」

「あいつら・・・。俺たちをバカにしやがってゐるやねえ」

くるりと盗賊の集まりのほうへ振り向く

「いぐぞー!」

「おー!」

「『めんなさい』……」

ルチアはさつきから謝つてばかりだ、アイルがため息をつく
「だから、もういって……。ルチアが悪いわけではないんだか
ら……」

「でも……。私が勝手な行動をしたから……」

レイはルチアの頭をやさしくなでる

「いいじゃん、ケガがなかつたんだからや」

「レイ……。ありがとう」

アイルは一人考え込む

「よし、やつぱりここで休むのは危険だ……。徹夜になるけどル
チアが歩けるなら移動しよう」

そう言つてルチアの顔を見る

「歩けるか? がんばつて徹夜で歩いてゆっくり宿で休みたいだろ?」

「うん、私は平気……。レイは?」

「おれはへーつき」

「そうと決まれば早く行こう……」

ルチアたちが野宿しようとしていたところはそんなに町からはなれ
ていなかつたみたいで店などが閉まる前に余裕でついた
町の様子を見に行つっていたアイルが戻ってきた

「宿は一軒しかなくて、その宿も一部屋しかあいてないらしい。ど
うする?」

レイが口を開いた

「どうするつて……。せつかく来たんだから

「そうだな……。じゃあ行こう……」

宿に入り一階の部屋に案内された。一階では酔っ払いが騒いでいる、
アイルとレイがほぼ同時にため息をつく

「どうしたの?」

「これじゃあ、ゆっくり休めないと思つて……」

ルチアは壁にかけてある時計を見る。針は9時半を指している

「まだ、10時前だよ。しょうがないよ……」「

「それもそうだな……」

「あ、俺散歩に行きたい」

アイルはレイを思いつきりにらみつけた

「お前一人にするどどこへ行くか解らないからおれも行く

「アイル君あつたまいい～、レイそんけーしちゃあう

抱きつこうとしたレイをアイルは殴る

「寝言は寝てから言え……。お前は寝ても言つな……」

アイルってキレたら怖そう……

ルチアはそう思いながら一人のやり取りをみている

「じゃあ、行つてくるよ……。ぜつつつつつたににここを離れるなよ！」

「う・・・うん、解つてるつて。レイと一緒にしないで

二人が出て行つてしまふると扉を叩くおどがした

もう帰つてきたのかな？

「はあい」

扉を開けるとそこには大きな花束を持った青年が立つていた

「あの、これはいつたい……」

「サービスなんです。女性限定のね」

そう言うと青年は花束の中に隠していたナイフを突きつけた

「きやつ」

「静かにしな……、ケガをしたくなかったら俺についてくるんだ」

「い、嫌だと言つたら？」

青年はニヤリと笑う

「そのときは大事なお友達にさよならしなきやな……」

「わかつたわ……。ついていきます」

月の明かりに包まれた幻想的な町は恋人たちがたくさんいる
「ここは恋人たちの町つて呼ばれているんだ……」

青年はルチアの腰に手を回し、顔を覗きこむ

「ふうん・・・。あいつらにくれてやるのはもつたいないな・・・」

「あいつら・・・？」

「そ、俺に君を連れてくるよ」命じたばかりだも

ルチアは首を傾げる、そのしぐさに青年は今は「昔恋人の面影を思い出す

「・・・・、君はそっくりだ・・・」

「誰ですか？」

「ん? なんでもない。お友達に見つからないつむに早く行かなきや・

・・・

町から少し離れた森の中に見つけにくい洞窟があつた

「おお、クラウス・・・。獲物は?」

「ちゃんと無傷で連れてきたよ」

「よしそ、じゃあその女をボスのところへ連れて行け

「了解・・・」

洞窟に入ると明かりで照らされている、おそらくそこにボスがいるのであるう場所とは違う、部屋へ連れて行く

「クラウスさん? あつちじやないんですか?」

クラウスはルチアをいすへ座させる

「ボスのところへ行つたら君はひどいことをされると想つよ・・・。

「でもそれがあなたの仕事じゃないんですか?」

「ふうとクラウスはため息をつく

「さつき言ったろ? もつたないって・・・

「それだけで?」

「違う・・・。俺がこの世で一番愛した人に似ていたから

「私が・・・?」

「うん、こここのボスにむじい殺され方で殺されたね・・・」

ルチアは目を見開く、クラウスはさみしそうにふつと微笑んだ

「君はいくつ力を使える?」

「四つですけど・・・まさか敵討ちをするつもりですか？」

クラウスはうなずいた

「そうだよ・・・。そのために君を連れてきた。協力してくれないかな？終わったら君はちゃんとあの一人のもとへ無傷でかえす」

「・・・いいですよ。協力します」

「ありがとう・・・。君は優しいんだね。あ、そうだ名前教えてよ」

「ルチア・フォン・エルウッドです・・・」

クラウスは目を見開き、エルウッドと小さく反復した

「ご存知ですか？」

「どうりで似てるわけだ・・・。フーラルっていう女性は君のお姉さんだろう？」

ルチアは優しかった姉・フーラルを思い出す

『ルチア、私好きな人ができたの・・・。クラウスって言つてねとつても優しい人なのよ』

「あ・・・、クラウス・・・。まさかあなたの恋人つて・・・」「そうだよ、フーラル・フォン・エルウッド。『ごめん・・・、守れなくてあんなむごい死に方をさせてしました・・・』」

ルチアの頬を一筋、涙が流れる・・・

「いいんですけど、かわりにお礼を言いたいぐらいです。いつも姉はあなたに元気をもらっていましたから」

「そうか・・・。まあ感傷に浸つてる場合じゃないな・・・。」

「・」

大広間らしき場所へ行くとボスがすっかり出来上がっている

「ボス・・・、連れてきましたよ」

クラウスはルチアを連れてボスの前行く

「おお、『ご苦労だつた。これは褒美だ・・・』

そう言つて男は金貨の入つた袋をクラウスの足元へ投げつける。

「女早くこっちへ来い・・・」

ルチアは言われたとおりに側へ寄る

ふつとクラウスは鼻で笑い、袋を蹴り飛ばす

「俺はこんなもの要らないほしいのはお前の命だ！」

ボスはピクリと眉を動かす

「そこに立っている女に見覚えがあるだらう・・・」

「そういえば、どつかで見たような・・・」

「そいつはお前が殺したフーラルの妹だ！俺はてめえをゆるさねえ！」

そういうとクラウスは男に切りかかる

「ボスを守れ！殺つちまえ」

男たちもいっせいに切りかかるとしたがルチアの起こした風に阻まれる

「そりはさせない！」

「あぐつ・・・」

ルチアの足元にクラウスが倒れこむ

「クラウスさん！？」

「へつへつへつへ・・・。酔つ払いだと思つて舐めてんじゃねえよ・・・」

ボスの蹴りがクラウスの腹に入り、クラウスは吹き飛ぶ

「ぐあつ」

「クラウスさん！！」

ボスはルチアの肩をつかむ

「あの女の妹があ・・・。いい女じやねえか姉さんとあんなじよう遊んでやる」

そのまま肩をつかんでいる手に力をいれ服を引きちぎる、ルチアの白い華奢な肩があらわになる

「部下の言つたとおりだ・・・。」

「くそつ、ルチアぼうつとするな！逃げる！――」

クラウスの言葉でルチアはハツと我にかえり、ボスとの間に風を発生させクラウスのもとへ駆け寄る

「なにやってんだ！逃げろ！――」

「そんなことできません！――」

ボスが歩み寄つてくるのが横目で見える

「俺はどうなつてもいいから早く！」

脳裏に姉のさみしそう微笑む顔がうかぶ

『ルチアがうらやましい・・・。私は人を守る力がない・・・。だから、あなたは人を守つて、優しい子だから出来るわよね?』

幼い頃、力を持たずに生まれた姉との約束

「私は・・・お姉ちゃんの恋人のあなたを見捨てることは出来ませんし、ここで守れなかつたらお姉ちゃんとの約束も守れない」

ルチアは手のひらをボスのほうへ向ける

「水よその姿を凍てつかせ、風とともにになり切り裂いてしまいなさい！」

出現した水は小さな氷のナイフとなつて男たちを襲つたが炎によつて溶かされてしまった

「そ・・・んな・・・」

ちから技では勝てないからこれにかけたのに・・・

「残念だつたなあ・・・」

ボスはそう言いクラウスの上に炎の槍5本を出現させ、そのまま落とした

4本はルチアが出した水の壁で防げたが残りの1本は本物の槍でクラウスのわき腹を裂いた

「クラウスさん!!」

「嬢ちゃんちょっと待つてなすぐにそいつことじめをさして相手してやる・・・」

ボスが剣を振り上げ突き刺そうとしたときだった

普通の狼の数倍もある黒い狼がボスを襲い人間の姿になつた

「とじめを刺されるのはどつちだろうな・・・」

「アイル!!」

アイルはルチアのほうを向き怒鳴つた

「だから、ぜつっつっつっつっつたに動くなつて言つたんだ！」

「ごめんなさい・・・。アイル危ない！」

数人の男がアイルを襲おうとしたが急所に矢が刺さり倒れた

「ここで、ルチアを怒鳴つてもしようがないでしょ……。まったく

アイル君はカルシウムが足りないのよ！」

レイはアイルをオカマ口調でからかいルチアに微笑を向ける

「俺たちが来たからもう大丈夫だよ」

「レイ……」

「そうだぞ……。だからそっちの男を治療してやれ

「わかった……」

アイルたちのおかげで数分で全滅してしまった

「よわいっ弱すぎる……」

クラウスのケガはルチアが治し完治した。今は眠っている
「良かつた……。でも良くないか、守れなかつたし……」
「ばあか、相手が悪かつたんだもともとお前の力は‘守る’ために
あつて‘傷つける’ためじゃない……」

アイルはルチアの頭を撫でながら続ける

「死んでないからいいじゃねえか」

ルチアは苦笑した

「アイルの言うとおりだね……。ありがとう……」

ありがとう……ルチア……。クラウスを守つてくれて……

フーラルの声が3人の頭に響く

それと、クラウスも旅に連れて行つてあげて……。これが本当の
彼の力じゃないの……。アイル君ならわかるわよね……

アイルはじつとクラウスを見つめる

「わかつてるさ……。こいつは俺の兄貴だしな。最強にして最恐
と謳われた男だ……」

そしてふつと笑う

「最恐のほうは消えちまつたみたいだけどな」

二人とも・・・、そしてクラウス・・・。ルチアを頼みます・・・

そう言い残し、フーラルの気配は消えた

月明かりに照らされ一人と一匹は町への道のりを歩いている

「つたく、なんで俺が・・・」

獣化して狼になつてクラウスを運んでいるアイルがぶつぶつ独り言をつぶやいている

「だつてえ、私運べませんもの」

「だまれ・・・。キモイ・・・」

そういうわれたレイはうそ泣きをする

「ひどおい！レイちゃん泣いちゃうわ」

ルチアはその光景を呆然と眺めている

あんな、険悪だったのがうそみたい

「くすくす、仲良いね」

「だろつ？」

嫌そうな視線をレイに送つてから、ルチアにたずねる

「おまえ、肩寒くないのか？」

ルチアはそういえばと破かれた服を見る、レイがマントを渡した

「これでも羽織つておけよ」

「おい、それ俺のだろ？」

「いいじゃんか。俺じゃなくてルチアに貸すんだから」「それもそうだな」

「コツリとルチアは笑みをうかベマントを羽織る

「ありがとう、あつたかいね・・・」

ふらりとルチアは糸の切れた人形のようになつた

「おつと、危ない。ルチア？どうした？」

アイルはため息をついた

「力の使いすぎだろう・・・。体が弱いのに無理して使うからだ

「へえ、早くついてあげてれば良かつたなあ」

レイはルチアを抱き上げる

「なんか、じつやつて見ると人形みたいだよな・・・」「ああ・・・」

宿に着き、ベッドに一人を寝かせた。

レイはアイルに気になっていたことをたずねる

「なあ、アイル。さつきルチアの姉さんはクラウスさん？はもつと強いつていってただろ」

アイルはそうだなと相槌をうつ

「なんで、あんなに弱かつたんだ？」

「それは、これのせいだろう・・・」

小さな巾着から綺麗な彫刻が入っている文物の指輪を取り出した

「？」

「これは、俺たちのもつてる力を弱めるためのリングだ・・・」

「なんで、それをお前の兄貴が？」

兄貴とつぶやき横目でクラウスを見る

「さあな、それは本人に聞いてみないとわからない。ただ一ついえることがある」

「？？」

レイは頭の上にはてなマークを浮かべる。アイルは目がすわっている

「お前さあ・・・本当に馬鹿だな。よく見てみろよ」

指輪をレイに渡す

「レイちゃん傷ついたあ。・・・この彫刻・・・花？」

「その、花の名前わかるか？」

アイルは頬杖をつき、横目でレイを見ている

「いやん。そんなに見つめないでえ」

「いいかげん、殺すぞ？」

握った拳からは殺氣がにじみ出でている

「・・・ハハハ・・・じょーだんです。ルチアって言つ真つ白な

花だろ？馬鹿にすんなよつてあ！」

やれやれとため息をつきながら視線を正面にもどす

「そう、たぶんそれはルチアに送るものだ・・・」

なんでそれをクラウスが持っていたかはわからないが、アイルは体力の限界を感じていた

「ふわ～あつと久々に獣化したから疲れた・・・俺は寝る。お休み

み」

「じゃあ、俺も寝ようつと。お休み、愛しのア・イ・ル君つ」

プチンと小さく何かが切れた音がした

「レイ・・・」

「な・・・なんですか？」

「俺が良く眠れるようにしてやるよ・・・」

振り向いたその笑顔はひきつっている

「あは・・・あはははは・・・。アイル・・・」
「ごめんとあやまろうとしたレイの顔にきれいにアイルの拳がクリーンヒットし、そのままベッドへ倒れこんだ

「ふんっ、俺はオカマに興味はねえ・・・」

翌日、朝食をとっている場で昨日の惨劇を知らないルチアはレイの赤く腫れている顔を凝視している

「ルチア、どうしたの？もしかして俺に惚れちゃった？」

「レイ・・・また俺のよーつくなれるおまじないが欲しいか？」

アイルは二コ二コしながらレイを見るが目が笑っていない

「ごめなさい、冗談です」

「ねえねえ、おまじないって何？」

「ん？内緒・・・悪い子にはレイだらうが兄貴だらうがやつちやうけどな」

「私にはないの？」

「ルチアは物好きだなあ。いつたいんだぞう」

ルチアは顔色を変えて首を振り、アイルを見つめた

「えつ？やだ、私にはやらないでね。」

アイルは苦笑しながらルチアの頭をなでた

「ルチアはいい子だからやらないよ・・・・・・・・・・・・」
たぶんと最後にボソッとつぶやいた

「今、多分つて言つたよね？」

アイルの顔を不審そうに覗き込む

「そりゃあ、昨日みたいな行動をしたらな・・・」

アイルはしぬつとしている

「あ・・・・・・。ごめんなさい」

目を潤ませながらルチアは謝る

「アイル君女の子泣かせるなんて最低！レイちゃん見損なったわ」「うるせー、黙つてろ。はあ・・・・、昨日はお前が無傷だったから良かつたもののもう少し自分の置かれている立場を考えてくれ・・・」

「ルチアは田を見開き、俯く

「それは巫女としての立場つてことだよね・・・？ルチアとしての立場じやないよね？」

「まあ、そうなるかな・・・・」

顔を上げたルチアの頬には涙が流れている

「ひどい・・・・。アイルなんか大嫌いっ」

ルチアは宿屋から出て行つてしまつた

「ルチア！・・・・・はあ、アイル。お前の言いたいことはわかるけど、あんな言い方したら傷つくつてわかるだろ？」

アイルは答えない、レイはさらに続ける

「お前からだつたらもつと他に言つてもらいたい言葉があつたかもしれないだろ？」

「ふんっ、じゃあお前が言つてやればいいじゃないか・・・・・・」

「だから・・・・・・」

アイルは乱暴に立ち上がつた

「あいつなんかほうつておけばいいんだ！そのうち戻つてくるだろうし、俺は知らない・・・・・・」

レイは負けじとアイルを睨む、アイルはふいっと田をそらす

「ちょうど、買いたいものもあつたしな。俺は出てくる」

アイルも宿屋から出て行つてしまい、やり取りを見ていたクラウス

はため息をつく

「頑固なところは変わらないな……。それじゃだめだつて本人もわかつてるだらうに」

「昔からああなんですか?」

「うん・・・まあ、ケンカなんかしてやつちまつたーと思つてもあいつから誤つたことはないな」

レイは大きいため息をついた

「はああああ・・・・・ルチアがかわいそうだよ・・・・・」

ルチアは町外れにある小高い丘に来ていた。

その丘には美しい色とりどりの花が咲き乱れている。

「アイルのばか・・・心配したんだぞの一言ぐらい・・・・・」

視界が涙でかすむ

「うそでもいいから言つてくれたつていいじゃない・・・・・」

ルチアはひざを抱え込む

「・・・・・ひっく・・・・・」

慰めるように温かい風がルチアを包んだ

「そういえば・・・これをルチアに渡し損ねた・・・・・」

クラウスは指輪を取り出した

「それつて、俺たちの力を制御するためのものですね?」

「そうだぞ」

「なんで、それをあなたがルチアに?」

クラウスはベッドの上に座り、天井をあおぐ

「本当はフーラルがルチアに渡そつとしてたんだ・・・・・。でも、その前に死んじました・・・・・」

「なぜフーラルさんはルチアに・・・?」

「ルチアは体がよわいだろ。それなのに無理して力を使おうとする・・・・・」

「だから、使わせないために・・・・・」

「だから、使わせないために・・・・・」

黙つてうなずきレイのいたコーヒーが入っているカップを口に持つける

それつきり一人は黙つてしまつた

イルは町の広場にあるベンチに頭を抱え込んで座つてゐる。

大きなため息を一つついた

「はあああ・・・・・。やつちまつた・・・、あいつ・・・・・泣いてたな・・・・」

そういうながら顔を上げる、広場にある噴水の流れている水は朝日を受けキラキラと輝いている

「あいつの涙みたの何年ぶりだろう・・・。どんなにつらくても人前ではほとんど泣いたことなんてなかつたからなあ・・・」

膝の上に頬杖をつき、噴水を見つめる

「あいつどこにいるかな・・・」

イルは立ち上がり、ルチアを探し始める

しばらくして、小高い丘に行くと花畠の中にいるイルの紺色のマントが見えた

「いた・・・・」

膝を抱え込んで泣いているルチアの前にしゃがみ抱きしめた

「ルチア・・・・・。ごめん・・・」

ルチアは顔を上げイルをみつめる

「ア・・・・・イ・・・・・ル、なんでここに?」

イルは申し訳なさそうに頭を下げ謝る

「ごめん・・・・。お前の気持ち全然考えてやらなくて・・・」

さらに続ける

「本当はすごい心配したよ・・・・。だからもうあんなあぶないまねしないでくれ・・・・お願いだ・・・」

ルチアはイルに抱きつく

「ありがと・・・・。大嫌いなんて言つてごめんね」

イルはルチアの耳元でニヤリと微笑む

「でも、心配かけたお仕置きはしなくちゃな・・・」
そう言ってアイルはルチアを押し倒す、二人は背の高い草花に隠された

二人はすっぽりと草花の中に隠れる、イルは貸したマントをはずす
「ちよつ・・・・・、イル何して・・・やあつ」

イルは破かれたまんまで露出している肩に口付けをする

「イルウつ、や・・・だあ・・・」

ルチアは必死に抵抗するが男の力に勝てるわけもなくされるがままにするしかなかつた

「な・・・んで？」

肩にうずめていた顔をあげ、意地の悪い笑みを浮かべる

「ん？ お仕置き」

「おしおきつて？」

ルチアは目を潤ませている

「あやまつたじやない・・・・・」

「・・・・・・・・・」

イルはそんなルチアをじっと見つめる

「なんで、だまつてのよう・・・・・」

答える代わりにルチアにキスをし、舌を絡ませる

「・・・・んつ・・・・・」

唇をはなしイルはルチアを抱き起す

「残念・・・・。人が来そうだ・・・・」

そりや、そろそろ唇だし子供も遊びに来るかとため息をつき、横目でほつと安心しているルチアを見る

ルチアと目が合つた

「な・・・何？」

「いや、ルチアはひどいと思つて・・・・」

「え？ なんで？」

集まってきた周りの人々に聞こえないようにルチアの耳元でつぶやく

「拒否つたじやん・・・・」

「それはアイルが……」

顔を赤くして反論するルチアを見て、ニヤリと笑う

「…………いじわる……」

そっぽを向いてしまったルチアをよそにアイルは手を引き歩き出す
「ほらっ行くぞ。新しい服でも買いに行くか」

「うへへへ」

「何唸つてんのだよ……」

アイルは眉間にしわをよせて、振り返る

「なんでもありません」

「なんだよ……」

「えへへへへ」

アイルは苦笑する、店員が困った顔でルチアにたずねる

「あの……、何かご不満が？」

「いや……、露出がちょっと多いかなと思って……」

そう言つと店員がぼそりと耳元でつぶやいた

「彼が喜びますよ……」

ルチアは顔を真っ赤にさせて俯く

「どうします？」

「……っ、買います……」

「お買い上げありがとうございまーすーー！」

宿屋に着くとレイが迎えてくれた

「あ、お帰りー。その様子だと仲直りしたみたいだね」

よかつたとレイは胸をなで、ルチアの姿に驚く

「そんな露出が多い服どうしたの？」

露出が多いといつても胸元は鎖骨が見えるていじで、スカートは短
いが……

類を紅潮させて俯くるルチアを見て、イルが代わりに答えるつとしだきにレイが続けた

「もしかして、俺を誘つてるの……？」

「アイルが『ココロしながらレイ』にアイアンクローバーをくらわしている

「笑えない冗談を言つてはどのくちかなー？裂くぞ？」

「ひいいいいいつづめんね、イル君つ、大丈夫よお、レイは、イル君だけだから」

イルの背中を悪寒が走る、頭をつかんでいる手に、さらに力をいれる

「キモイからやめろって言つてんだろ」

「その服だと巫女である証の紋章が目立つな……」

クラウスがそうポツリとつぶやく、そしてハッと思い出したようにルチアの手をつかんだ

「きやつ……」

「そうだこれ、フランから君に」

そう言つて小さな巾着から指輪を取り出して左手の小指につけてやつた

「お姉ちゃんから？」

ルチアはジッと指輪を凝視している

「君に力を使わせないためにだよ。君を心配して作つたんだ」

指輪の上にルチアの涙が一粒零れ落ちる

「……………」

その様子を見てふつとイルは微笑んだ

「よかつたな、ルチア……」

「うん……」

ルチアはニッコリと笑う

このときは君の笑顔が“消える”なんて思いもしなかつた

「わい、明日はせいかの町を出よ。まずは第一の神殿に行かなきゃな」

「やうだね、ここから南だよね？」

アイルは頷く

「ああ、やうだよ。じゃあ、明日は早いから早く休もう」

自分の部屋に向かう、アイルの背中を見て、ルチアは苦笑みしきつて微笑みつぶやいた

「どんな未来が私にあっても、私がこの世界から消えてしまうようなことになつたとしてもアイルは笑っていてね……。私は大丈夫だから、みんながアイルが幸せならそれで十分だから……」

「アイル！…起きて」

アイルはもぞもぞと布団の中で動く

「う・・・・ん、まだ日の出前だら？」

ルチアはでもと続ける

「早く出るつて昨日言つたじゃない」

「どうせ、一人とも起きてないんだろ？」

「そりや、そりだけぢ・・・。アイル？ もやつ」

ルチアをベッドに押し倒してキスをする

「ん・・・うつ。アイル・・・？」

「早起きは二文のとくつて言つし。昨日の続きをでもやるか」

「！ やーー一人がおきちゃう」

「じゃあ、声出すなよ？」

「アイルのいじわるつつ。あ・・・いやつ・・・」

そりやどーもと言つて首筋に舌を這わせる。ルチアの甘い吐息が耳元にかかる

「・・・ひ・・・あつ、や・・・めてえ・・」

アイルはルチアの背中に手を回してチャックを降ろす。ふくらみがあらわになつた

「アイルのえつちい・・・。！」

桃色の突起を口にふくみ甘噛みをし、片手でスカートをめぐり秘部を薄い布の上から撫でる

「／＼／＼／＼／＼つ、く・・・うつ

「我慢してんの？」

ルチアは涙で潤んだ瞳でアイルを見つめる

「は・・・あつ、だつて・・・声出すなつて・・・」

そうだつたと頭をかいて、ルチアに優しくキスをした

「今日はこれくらいでがまんしてやるよ

「アイル…………ねえねえ……」

ルチアは服を直して立ち上がりつたアイルの服のすそを引っ張る

「どうした?」

「朝になるまで、だつこして」

「はあ? いいけど…………急に甘えんばさんになつちやつたな
そう言つてベッドに座りルチアを抱きしめる、ルチアはアイルの背
中に手を回した

「本当にどうした?」

「わかんない…………不安なの」

「ルチア…………」

アイルは抱きしめる手に力をこめる。その時レイがドアを叩いた

「アイル? なんか大きい音がしなかつた?」

パツヒルチアが離れる。アイルは返答をした

「なんでもない…………」

「あつそう。んじや、おやすみ!」

また、寝るんかい!

アイルは一度寝をしようとしているレイに心の中で突っ込みを入れた

「つたく…………ルチア?」

ルチアのまつに振り向くと、ルチアもアイルのベッドで眠りこつていた

「はあ…………ここつもかよ…………」

『不安なの』

ルチアのさきほどの言葉がよみがえる

「まさか…………こいつ…………」

自分がどうなつてしまつたか知つてるんじや…………

アイルの脳裏に不安がよぎる

「ちくしょう、俺はどうしてやることも出来ないのかよ

「レイ、遅い……。一度寝なんかするからだ。ばあか」「レイちゃん傷ついたあ」

メソメソとウソ泣きをするレイをよそにため息をつく。「いいかげん、気持ち悪いからやめてくれないか?」

「やあよ。だつてアイル君の反応が楽しいもんつ」

「じゃあ、もう何も反応しない」

「それじゃあ、つまんねーだろつ。なつルチア?」

「ぼうつと一人のやりとりを見ていたルチアがハツと氣づく

「ふえ? あ、うん、そうだね」

「ふざけてないでそろそろ行かないか?」

呆れかえっているクラウスが口を開く

「「「はあい」」

「んじや、行くか……。第一の神殿に……」

「行きますか」

4人は様々な思惑をもち宿を出る

そこはまるで時代に置き去りにされたような寂しいところだった

「ここ?」

ルチアは地図を開き確認する

「ここだねえ」

「こんな、ボロいの!?」

「そりゃあ、誰も管理してないから」

そう言ってアイルは神殿・塔を見上げる

昔は美しく輝いていたであろう塔を

「ねえ、早く入らない? ここであることには変わりないんだから」

「そうだな、入るか……」

建物の中に入るとそこは光はぼうつと白く輝いている魔法の産物だけ……。4人には異質な空間だった

「こんなのが、教科書や歴史書でしか見たことないな」

光源をみたイルがつぶやく

「イル!! 危ない!!」

イルが振り返ったときにはクラウスが襲ってきた魔物を切り伏せていた

「あ、さんきゅ 兄貴・・・」

「ぼーっとするな、それが命取りになるぞ」

「悪い・・・」

すぐ横で大きな物音がしたと思うとルチアとレイが魔物を倒していた
「まだ、こんなにいる・・・。きりがないよ。」

「ルチア、ここは俺に任せて」

「え、うん?」

レイは弓を上に向けて矢を放つ

「はじけろっ」

レイがそういうと一本の矢がはじけたくさん光の矢になり放物線を描いて刺さる

「すご~い・・・」

「ほらっ、今のうちがあつちに階段があつたから行こう」

「たまには、やるじやねえか」

階段を駆け上がりながら、イルがレイに言つ

「やるときはね・・・。やれば出来るのよ」

「へえ・・・」

階段を上り終わるとそこには大きな祭壇がある

「ここで、祈りをささげるのか?」

「みんな!! 下がつて!!」

ルチアが3人の前に出たと思つたら、普通のライオンの数十倍の大
きさはある羽の生えた魔物がたつていた

「ここまでたどり着いたものを見るのは何年ぶりだろうか・・・。
久しいな・・・。お前たち何者だ?」

「お前こそ何者だ?」

アイルは魔物を睨みつける

「ほう、ずいぶん肝が据わっている小僧だな・・・。名はない、この守護者だ」

「へえ、女神は魔物を守護者にするのか」

「アイル！」

ルチアが制したがアイルは聞かない

「私は神獣と呼ばれるものだそこいらにいるものと勘違いするのではない。もう一度聞こうお前たちは何者だ？」

そこまで言つて神獣はルチアの胸の紋章に気付く

「それは、紋章か・・・娘、お前が今回の巫女か？」

「あ、はい。祈りをわざげに参りました」

「武器は持つているようだな。武器を持て」

ルチアは戸惑う

「は？ 何ですか？」

「これは試練だ。我に勝てなければ祈りをわざげることを許さん」

一同は武器を持った、アイルが剣に手をかけながら言つ

「はっ、おもしれえ。ケンカ売ったことを後悔すんなよ」

No.7(後書き)

初めて・・・、でもないですが、ちょっとぴり(?)えっちに挑戦してみました・・・
ダメですね、慣れてないから全然へたですね。お恥ずかしいです

ぎゅっとルチアは剣の柄を握った

『ルチア！！おびえるな。おびえたら負けだぞ！！』

小さい頃、先生に戦いを教わったことがあった。そのときの記憶がよみがえる

『ルチア・・・。おびえりやダメだと言つてゐるだひつ』

ルチアは俯き、涙をこぼす

『だつて、怖いもん』

フランが口を開く

『先生、まだルチアは幼いですしう。無理がありますよ』

『・・・しかたない。だが、これだけは覚えておけ。敵に情けをかけるな』

『情け？』

ルチアは首を傾げる、先生はうなずいた。

『そうだ、お前は優しい。だが、それが命取りになることもあるかもしれん』

『大丈夫だよ先生！！』

ルチアはニッコリと笑う、その笑顔は不思議と一人を安心させるものだった

『だつて、みんなほんとうはきっといい子なんだよ』

『ふう・・・、ルチアにはかないませんなあ』

そう言つてルチアの頭をなでる、えへつとルチアは笑つた

おびえるな、おびえたら負けだ・・・

『ルチア！！お前はさがつてろ！危険だ』

イルはルチアを戦前から退けようとしたが、ルチアに阻まれる

「ダメよアイル……。これは私の戦いでもあるの。みんなに任せることはできない」

「でも……」

「大丈夫、みんなを援護するだけだから。だつてアイルは前にこう言つてくれたじゃない『お前の力は“傷つける”ためじゃない“守る”ためにあるんだ』って」

苦笑いを浮かべたアイルはルチアから手をはなす

「つたく、おまえにはかなわねえなあ」

その時、神獣の爪がレイを襲おうとしたが、ルチアの力によつて阻まれた

「うわっ、あぶねえ。さんきゅ、ルチア」

「みんなを傷つけることは許さないわ」

神獣は見下ろし冷たい視線をルチアにやる

「ほう、なかなかやるではないか」

じとりといやな汗がルチアの背中を流れる

「あ、あたりまえでしょ。守られてばかりなんていやよ」

「では、これは防ぎきれるかな?」

闇の因子が神獣の口元に集まり、4人めがけて放たれる。

「これをくらえば、もう無理だろう。退屈しのぎにもならんかったな」

帰ろうとしたその時背後からクラウスの声がした

「それはどうかな? 敵に背後を見せるとはまだまだだな」

神獣の反撃は間に合わず、クラウスに首もとを切られ倒れる

「アイル!! どどめを刺せ!!」

「わかってる」

剣を振りかざしたアイルをルチアが止めた

「待つて!!」

「「「!?」」

「なんで、止めるんだよ」

ルチアはアイルの問いかけを無視し神獣へ近寄る

「おいつ、危ないぞ」

そして、しゃがみ治療を始めた
「な・・・・・ぜ・・・・・？」

「この世に死んでいい命なんてないよ、綺麗」とだけどね・・・・。

悪いやつなんていない・・・・そう信じて育つてきたから」
そう言われた神獣は苦笑し、静かに目を閉じる

「どうか、お前は濁りのない美しい心を持っているのだな。試練は
いらなかつたかもしれんな」

「それだけじゃないんですよ。」

閉じた目をうつすらとひらく、ルチアはニッコリと笑った

「？」

「・・・・あなたが居なくなつたらこゝは誰が守つていくんですか
？大切な場所なんでしょう？」

「そうだつたな・・・・。ありがとう・・・・。さあ、我はもう大
丈夫だ早く祈りをささげなさい」

ルチアはすくつと立ち上がり、祭壇の前へ進む。

そして、静かに目を閉じ手を組むとルチアの体が光り輝いた
「まぶしい・・・・」

光のまぶしさに3人は目を細める

ルチアから輝きがなくなると、アイルたちのほうへ向き直る
「終わったのか？」

「うん、ばっちり」

「そうか・・・・。」

神獣が外へのゲートを作り、促す

「貴女たちに女神の加護がありますよう願う・・・・。ルチア・・・
と言つたな。」

「？　はい」

「お前ならこの儀式の本当の意味・・・・女神の願いを理解できるだ
ろ？・・・・・」

「？？？」

ふつと笑い神獣は姿を消す

「私は眠りにつくとしよう」

クラウスが3人を促した

「長居は無用だ、行こう」

「ああ、儀式の本当の意味ってなんだろうな・・・」

「そうだね」

外に出ると青空が広がっていた

「うーん、やっぱり外の空気が一番だね」

「だな、さて次の封印は・・・」

「王都に近い場所だな」

地図を開いて確認したレイが口を開く

「王都・・・・なのか?」

クラウスがレイに確認する

「地図は読めるよー!そこまで方向オンチじゃないーーー!」

アイルとクラウスはため息をつく

「どうしたの?」

「いや・・・なんでも」

レイとルチアは顔を見合わせ首をかしげる

「「?」」

「まあいいや、行こうぜ」

「あ、うん」

N o . 8 (後書き)

アクション? シーンはいかがでした?

次回はイルとクラウスの出生について書きたいと思います。

相手の出生なんて気にしたこともなかつた……
そんなの関係ない、気にしないくらい“一緒にいる”ことが楽しか
つたから……

「アイル、大丈夫？ 少し休む？」

ルチアは顔色が真っ青なアイルの横顔を心配そうに見つめる。

「へ？ あ、ごめん。大丈夫……」

眉間にしわをよせ、「本当に？」という顔をしているルチアを見て、
アイルは噴出した

「くくつ、大丈夫だつて」

「あ、笑うなんてひどい！ 心配してると……」

「ごめんごめん、でも本当に大丈夫だから」

納得いかないという顔をしているルチアをなだめて気付かれないと
うにため息をついた。

少し黙つて話題を探していたルチアはそういえばと顔をパッとあげる

「ねえ。王都つて一人の故郷だったよね？」

「え！ ？ そうだったの？」

レイはおどけた声を出した

「知らなかつたなあ。だからここの近辺の地理に詳しかつたのか……」

クラウスは眉間にしわを寄せ、ルチアとレイを睨む

「そんなことはない、当たり前だ。それと無駄なおしゃべりは体力
を消費するぞ」

「「はあい」」

二人は顔を見合させて首をかしげてアイルとクラウスに聞こえない
ように話した

「なんか、機嫌悪い？」

「そーだね…。小さい頃の苦い思い出でもあるとか?」

ルチアは眉間に皺を寄せつづりんと唸る。

その姿にレイは噴出す

「ルチア、さつきのクラウスみたいだよ?」

「え? そう? レイ、ひどい。……でも、本当になんでなんだろ? せっかく故郷に帰ってきたのに」

そう話している間に王都の姿が見えた

「あれが、王都だ」

アイルが城壁を示した。ルチアはほほつと感嘆の吐息を漏らす
「きれい…。すごーい、素敵なところだね! アイル」

ふつとアイルは苦笑する

「どうか? それはよかつた」

ルチアはニッコリと笑う、アイルは首をかしげた

「どうした…?」

「ん? 苦笑いつていうのはなんだかイヤだけど…。やつと笑つてくれたと思つて」

「さつきも何度も笑つたけど…」

今度はルチアが苦笑した

「だつて、ぜえんぶ眉間に皺がよつていきましたよ?」

そう言つて、まねをしてみせる

俺、こんなに心配かけていたんだ。悪いことしちゃったかな?

「どうかした?」

「いや…なんでも。」

城壁まで近づいてくるとアイルとクラウスは隠れるようについてきた。

だが、見つかってしまうものは見つかってしまうのです。

「殿下! ? うわあー、本物だー。」

うわあ、失礼な兵士だ…。ルチアとレイは内心つっこみをいれつつやり取りを聞く

「おまつ、何を失礼なことを申し上げているんだ! クビになりたい

のか！？」

もう一人の見張りの兵士が駆け寄つてきて叱責し、二人に向かつて深々とお辞儀をする。

「はあ、数々の失礼申し訳ございません。」

「いや…、別に」

「お二人ともお久しぶりでござります。少し見ない間にこんなに大きくなられて…、爺はうれしうござります！」

そのまま、連れ去られるようにして四人は城へ連れてこられた。

「両陛下も姫様も大変心配されておりででした」

初老のヴァンは王家に仕える人だとルチアはアイルから説明を受けた。

「そちらの方々は？」

「あ、そうだつた。紹介がまだだつたな…」

そしてルチアを示す

「ルチア・フォン・エルウッド、今回の巫女だ」

ルチアはお辞儀をした

「はじめまして。」

「ほお、巫女様ですか。大変お美しい方ですなあ」

で、次にレイを紹介する前にレイは自分で自己紹介をした

「レイ・ロト・ルルスです。アイル様の親友です！」

「ルルス？ルルスと言いますと、四大貴族の一つの？」

「Yes! そうです」

「アイルって王子様だつたんだねえ。どうりで氣品があると思つた」
謁見までにと客室に通された四人は出されたお茶菓子と紅茶に手をつける

「氣品は、お前のほうがあると思うが…？」

「そうかな？それよりも、レイがルルス家の跡取りだつて言う方が驚きだよ」

アイルとクラウスもルチアに同意する

「たしかに、こいつからは気品なんか微塵も感じないけどな」

レイはむつとアイルをにらむ

「品はどうこいだろお？失礼だぞ！」

「なんだと？もう一邊言つてみろや」

二人のやり取りを見ながらルチアは溜息をつく。その様子をみたクラウスが顔を覗き込む

「どうした、ルチア？こいつらがうるさいなら黙らせるが…」

ルチアは首を振った。言い争いをして二人も黙る

「いえ…、みんなすごいなあと思って。それに比べて私なんて…」
うつむいたルチアの手に涙が一粒落ちる。震える肩にクラウスがそつと手を置いた

「出生なんて関係ないだろ？…お前には巫女という大任があるじゃないか」

肩から手を離して優しく頭をなでる

「地位なんか気にすることない。胸を張つて生きればいい」

「クラウスさん…、ありがとうございます」

ルチアは涙をぬぐいほほ笑む、クラウスは苦笑する

「全部、フーラルの受け売りなんだがな。第一こんなことで落ち込むなんてらしくない」

「そうですか？…、そうですね」

ふふっとルチアは笑つた、それにつられて三人も笑う

「身分の違いはあれどおれたちは“仲間”だ

「うん、そうだね…」

レイがそれに付け加える

「旅が終わつてもだ。な、アイル？」

「そうだな」

その場に私はいないかもしれないんだ…。私がいなくても今みた
いに笑つていてね

「ルチア…？」

コンコンと扉をたたきメイドが入ってくる

「両陛下、イヴ様のお支度が整いました。謁見の間に来るよつ」とおっしゃつております」

クラウスがうなづく

「わかった、今行く。ほら、ルチア涙をふいて」

「あ、はい…」

謁見の間に入ると黒色の髪をした少女がアイルに抱きつくる

「お兄様！」

急に抱きつかれたアイルはバランスを崩した

「うわっ、イヴ…。元気そうだな」

「はいっ有り余つてます。お兄様もお元気そうでなによります、有り余つてなくてもいいんだけどな…」

アイルは苦笑して頭をかいだ、その様子を見た椅子に座っている女性が姫をたしなめる

「イヴ、うれしいのはわかりますがアイルもお客様も困つてているでしょう？」

「はい…」

イヴはしぶしぶとアイルから離れた

「父上、母上お久しぶりです」

「うむ、クラウスもアイルも元気そうでなにより」

玉座に座っている人の良さそうな若くて瘦せている男性がうなづく

アイルは王妃様に似てるんだ

「そちらのかわいらしいお嬢さんが巫女様なのですか？」

「あ、はい。はじめてまして、ルチア・フォン・エルウッドと申します」

ルチアは深いお辞儀をする、その姿をみた王妃がふふっとほほ笑む

「礼儀正しいお嬢さんね。アイルも見習つてほしいわ。ねえ、アイル？」

「うつ…。耳が痛いです…」

「レイ君のほうもヴァンから聞いたぞ。」

レイは軽くお辞儀をする

「それにして、すこいわ！巫女様の護衛に選ばれるなんて」「

「そうですね、巫女様の足手まといになつていなか心配ですが」「

ルチアはあわてて首を振る

「いえつ、こっちが足手まといになつていなか心配です」「

「謙虚なお嬢さんだ。そういうえば、用があるから来たのだろう？」「

国王はイルに問いかける

「はい、神殿が王都の近隣にあると聞いたので知つてゐることはな
いかと…」

国王は少し考へ、顔をあげる

「調べさせよう。その間はここでゆつくりと休め、客室の用意もし
ておく」

イルは頭を下げる

「ありがとうございます」

「じゃあ、私は巫女様とお話したいわ！」

そう言つてイヴはルチアをひつぱる。急に引っ張られたルチアはバ
ランスを崩すが、すぐに立て直した

「いいですわよね、巫女様？」

「あ、はい。私でよければ」

ルチアはほほ笑む、その笑顔をみたイヴもこつこつと笑つた

「じゃあ、行きましょう」

ぐいっとルチアの手を引いて駆け出す

「イヴ！あんまり迷惑掛けるなよ！」

くるつとイルのほうを向いて、下を出す

「お兄様と一緒にしないでくれます？」

ペコッとお辞儀をして退出する一人の後ろ姿を見て王妃がくすりと

笑う

「女性と話すのは私や側仕えぐらいだからうれしいのね。ルチアさ

んはお姉さまのよつたな方ねえ」

クラウスも同意する

「ええ、この人をよくまとめてくれますよ」

「そうなの？…まあ、イルつたらイヴのこと言えないじゃない」「すいません」

「ところでクラウス。あなたの恋人はどうなったのかしら？」遺族の方とはお話しなさったの？」

クラウスは視線をそらす

「王妃、その話はまた今度でよいではないか。せっかく帰ってきたのだから」

「それもそうですね。では、晚餐までゆっくりしていなさい」「はい、失礼いたします」

三人の去っていく姿を見て、王はさみしそうに微笑む。

「少し見ない間にたくましくなりおつて。」

「そうですね。でも、中身はまだまだ子供ですわ」

王妃はため息をおとし、肩をすくめる。

「ああ、まだ。目が離せんなんあ」

王は三人が謁見の間を出るまでその後ろ姿を見つめていた。

ルチアはイヴに手をひかれ庭園に来ていた。

「きれい…すてきですね姫様」

姫に示されるままベンチに腰を下ろし、にこりとほほ笑んだ。

「うん。ここはお城の中で一番大好きな場所なの！」

「そうなんですか。ここは見晴らしもいいみたいですね」

高台に建っている城なので、あたりを見回せば城下町はもちろん城壁の外まで見渡すことができる。

「あ…あの…」

「？どうかしましたか？」

「巫女様はアイル兄様の恋人なの？」

突然聞かれた質問にルチアは真っ赤になつて答えた。

「え、あの、その…そんな、恐れ多いこと…」

「なんで？身分なんて気にすることないじゃない」

イヴは首をかしげて続ける。

「だつて“巫女”っていう大任を任せているんだもの」

その言葉を聞いたルチアはクスッと笑つた。

「私なんか変なこと言った？」

「いえ、クラウスさんと同じことを言つたので…」

「クラウス兄様と…ふうん。私、あの人のことよくわかんないわ」

イヴはうつむいてしまつてどんな表情になつているかはわからなかつた。

「？」

「そういえば、結局一人は恋人なの？」

「そう思いたい…」

それを聞いたイヴはぱっと顔を輝かせてわらつた。

「素敵！こんな美しい方には好かれるなんて。ねえ、お姉さまってお

呼びしてもいい？」

「えつ。よろしいですけど…、両陛下は何か言わないでしょうか？」

ルチアは心底驚いたという顔をした。

「大丈夫よ。だから、あなたも敬語は使わないでイヴって呼んで？」

少し戸惑ったような表情を見せたがすぐに優しく微笑みかけた。

「じゃあ、お言葉に甘えて…」

「本当！？うれしい！私ずっと御姉様がほしかったの！」

そう言うとイヴはルチアに抱きついた。

そして、そのまま胸に顔をうずめる。

「お姉様はいい香りがするね…。やさしい香りがする」

「そう？」

ルチアは抱きついているイヴを優しく抱きしめ頭をなでる

「うん、それに温かい。…………」

「イヴ？」

静かになってしまったイヴは寝息をたてている。

その様子を見たルチアはくすっと笑う。

「はしゃぎすぎて疲れちゃったのね…。可愛い、私もねあなたみたいな妹が出来てうれしいよ

だから今はこのまま…

お姉ちゃんもこんな感じだったのかなと優しかった姉を思い出しながら静かに目を閉じた。

ルチア…

暖かい風が一人を包み込んだ

その、静寂は一人の男によつて壊された。

「ルッチア～～。見つけ！」

庭園の入口からルチアを見つけたレイが飛びつこうとしたがあと少しの所で届かずに転んだ。

「レイ！？だ、大丈夫？」

ルチアが声をかけるとおでこをこすりながら起き上った

「うーん？大丈夫だよ」

それよりもトルチアの腕の中で寝ているイヴを見る。

「起きなくてよかつた。騒がしくつてごめんね」

「ああ、疲れちゃったみたいなの」

「そつかあ…。じゃあ、ベッドで休ませてあげたほうがいいんじゃないかな？風も冷たくなってきたし」

ルチアはこくりとうなずき立ち上がりうつとすると、レイがイヴを抱き上げた。

「ありがとう」

「どういたしまして。さ、行こう」

城内に入りイヴを寝かせて一息ついた二人はイヴの部屋を出た。先ほどからずっとレイを見つめていたルチアにレイは声をかけた

「ルチア…。どうしたの？」

「え？あ、ごめん。意外と気がきくんだなと思つて…」

「それ、失礼じやない？」

そう言いつとレイはルチアの手を引きえられた密室に入りベッドへルチアを押し倒した。

「あ…、レイ…ごめんね」

「いやだつて言つたら？」

レイはルチアの腕から片方の腕を放して、ルチアの唇をなぞるルチアの顔色がみるみる変わるので見て、クスッと笑つた

「う・そ」

「え？」

ルチアから体を離して、抱き起こす

「聞こえなかつた？嘘だよつて言つたの」

「あ…。ひどおい。レイの意地悪！」

「そんなに怒らないでよ。せっかくの可愛い顔が台無しだよ？」

レイは優しくルチアの頬に触れる

「ほら、笑つてよ」

「ふふつ、レイにはかなわないね」

「うん、可愛い可愛い」

その時部屋のドアが開き、アイルが顔をのぞかせた

「ルチア？いるのか？」

「アイル！どうしたの？」

「あ、いた…。ん？」

アイルはいつの間にかにルチアの腰に手を回しているレイを見る

「おい…。レイ」

「ん？なあに、アイル君？」

レイはアイルが手をボキボキと音を鳴らしながら近づいているのに気が付かずにへらへら笑っている。

「そんなに、寿命を縮めてほしいのか？」

ルチアはあわててアイルを止めた

「ア、アイル！ストップ！！けがしたらどうするの？」

振りかざしたこぶしを下ろしたら、ルチアはほっと胸をなでおろした

「私を探していましたんでしょ？どうしたの？」

「あ、いや。イヴが探していたから」

「そうなの？じゃあ、行かなきや」

ルチアはベッドから立ち上がりアイルの手を引く

「行こうよ。レイは？」

レイも立ち上がった

「じゃあ、一緒に行く」

アイルはいやな顔をした

「いや、お前は来なくてもいいよ」

「ええ。レイちゃん傷ついたら…」

「キモい…」

部屋から出て廊下を黙つて歩いていると、ルチアが口を開いた
「ねえ…、アイル。クラウスさんとイヴちゃんって仲悪いの？」

アイルは考え込むように唸る

「ううん。仲悪いって言うより、なんて言つたらいいいんだろ?...」

“兄”っていう実感がわかないんじゃないか?」

それを聞いたルチアはアイルを見上げ首をかしげる

「なんで?」

「いや…。兄貴はまつたくと言つていいくらいここにはいなかつたし。特にあいつが生まれてからは…。放浪癖が激しかつたから…」

「ふうん。そうなんだ…。あ!だからあの時『よくわかんない』つて言つていたんだ…」

アイルは一瞬目を見開いたがそつかとうつむいた

「確かによくわかんないかもな…。俺もわかんないことがあるし」

「そつか…」

再び沈黙の状態になるとそれを破るように廊下を走るかわいらしい足音がする。

「あ!お姉様見つけ」

いきなり飛びつかれたルチアは転倒しそうになつたがレイが支えた

「お姉様?お前いつから…」

「さつきよーだつてそう呼んでもいいつて言つてくれたもの!…」

「そうなのか?」

レイに支えられ体制を立て直したルチアがうなづく

「うん、まあ…。だめだつた?」

「別にいいけど…。イヴ、あんまり迷惑かけるなよ?」

イヴは負けじとベートと舌を出した

「お兄様に言われたくないわつ。あ、そつそつ3人ともお母様が呼んでいましたよ」

3人は顔を見合せた。

「とりあえず行つてみるか…」

ルチアはものす』、数の奇麗なドレスを前にただ呆然と突つ立つていた。

なぜ、こんなことになつて？それは数時間前のこと…

王妃の私室に入ると、紅茶を片手に優雅に読書していくといふだつた。

「母上、お呼びだつたと聞いてきたんですが…」

イルは王妃に恐る恐る尋ねると、王妃は本から顔をあげた。

「ああ、晚餐にその恰好で出るわけにもいかないでしょう？洗濯して直してあげたいし」

そう言われてみればと3人は自分の服を見る。

確かにところどころ傷などがついている場所がある。

「だから、服をねお貸ししようと思つて…。ルチアさんは私が選んで差し上げるわ。」

につこりと王妃はルチアに微笑みかける。

「あなたたち男性陣はヴァンに選んでもらいなさい」

はあいと返事をして3人は部屋を出た。

一緒に来ていたイヴが王妃へ飛びつく。

「ねえ、私も一緒に選んでいい？」

「私は良いけれど…。ルチアさんはいかががしら？」

「あ、構いませんよ。」

そうと言つて王妃はほほ笑んで読んでいた本を机の上においた。

「じゃあ、先に体を洗つていらっしゃい。イヴ、案内して差し上げて」

「わかつたあ。行こ」

そう言つてルチアはイヴに手をひかれ、お辞儀をしながら部屋を出て行つた。

「本当に礼儀正しいお嬢さんねえ…。アイルと結婚してくれないか
しい…」

「くしゅんっ」

手をひつぱつっていたイヴは振り返り首をかしげた。

「風邪？」

「うーん、違うと思つけど…。」

心配そうに顔を曇らせたイヴを見てルチアはほほ笑んだ
「大丈夫だよ。誰かが噂でもしてるんじゃない？」

にこつと笑つたイヴを見て、ルチアも笑つた。

「あ、ここがお風呂だよ。出た時に着る服は用意しておくからね

「ありがとう」

「じゃあ、じゅっくりどうぞ」

パタンと脱衣所の扉をしめた。

着ていた服を脱ぎ、浴室へと入ると見覚えのある濃い緑色の髪の毛
が湯けむりの中から見えた。

その人物が振り向きルチアと田代が合図。

「え…きや、きやああああああああああ！」

幸いルチアは体にタオルを巻いていたけれどびっくりして前を隠す
ようにしながら後ずさる。

レイは素早くルチアの後ろに回り、口をふさいだ。

「んんっ」

「しいーつ。騒ぎを聞きつけてアイルが来たら俺殺されちゃうでし
ょ？」

ルチアの口元から手を離して苦笑した。

「あ、ごめん…。でも、なんでここに？」

「え？ ああヴァンさんに風呂に入れつて言われてね。ルチアも？」

ルチアはうなずいてあたりを見回した。

「2人は？」

「プライベートバスつて言うの？そっちに行つてるよ

「「」はお客様用つてこと？」

「だらうねえ…。あ、このことは内緒ね？」

レイは口元に人差し指を立て笑った。

「俺、まだ死にたくないからさ」
くすりとルチアも笑つた。

「そうだね…」

「ほら、風邪ひっちゃうから早く湯船につかりなよ」

言われた通りに湯船に入つたルチアから少し離れた所にレイも入つた。

お互に氣まずくなつて沈黙が続いたが先に口を開いたのはレイだった。

「お前の髪つてプラチナブロンドの中に少しだけ銀髪が混じつてゐんだな…」

「うん、そうなんだ。お父さんが銀髪なの、確かお母さんがプラチナブロンドだつて聞いたつけな…」

聞いたつけという言葉を聞いてレイは謝つた。

「あ、「めん…」

「「めん、いいよ。お母さんがないなくても全然さみしくなかつたら…。」

「そつか…」

再び沈黙が続いてしまい耐えきれないといつた感じにレイが立ち上がつた。

「俺先に出る」

「あ、うん。また、あとでね」

しばらくして体と髪を洗つて風呂から出て今にいたるところとしてある。

茫然と突つ立つていると後ろから王妃が声をかけた。

「髪はちゃんと乾かしたみたいね…。」

「王妃様…」

振り向いたルチアに近寄り顔に触れる。

「？？」

「肌がとってもきれいなのね。何色でも似合いそうだわ…」

そうねと言つて近くにあつた薄い桃色のそれなりに落ち着いた感じのドレスを手に取る。

「これなんかどうかしら？あなたの肌の色がよく映えると思うのだけど…」

「いいと思います」

そうと笑つてそばにいるメイドを呼びドレスを渡す。

「じゃあ、着替えさせて髪を結つてあげて頂戴」

「はい、王妃様。では、こちらへ…」

メイドはルチアを別室へ促した。

「あ、王妃様」

「何か？」

ルチアはほほ笑み、お辞儀をする

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

そのころイルたちはといつと…

「なあ、ヴァン…」

イルに呼ばれ振り向いた

「なんですか？」

「もつとラフなのない？」

そう言われたヴァンはあきれとも怒りともなんとも複雑な表情をした。

「何を言つているのです。小規模とはいえこの城下町に住んでいる貴族の方たちを招くのですからしつかりした格好をしてください」「はいはい、わかつたよ。着ればいいだろう、着れば…」

溜息をつきながらイルはきゅっとネクタイを締めた。

そこへ着替え終わったレイとクラウスが入ってきた。

「お～。様になつてるじゃん」

アイルは鏡越しに返事をする。

「お前もな。はあ、こんなカッコしたのいつ以来だろうか…」

「さあ。やっぱ、なれないかつこつはきついな…」

そこへメイドが一人入ってくる。

「失礼します」

クラウスがドアを開け、返答をする。

「どうした?」「どうした?」

「晩餐の用意ができましたので、謁見の間に集まらください」

「わかった。すぐ行く」

それを聞くとメイドはお辞儀をして出て行った。

3人が謁見の間へ行くとすでに王、王妃はもちろんイヴや貴族たちが集まっていた。

きょろきょろとあたりを見回しているアイルにクラウスが声をかけた。

「アイル? どうした?」

「いや、ルチアはどうしたのかなって思つてさ…」

「アイル?」

後ろから声をかけられはっと振り返る。

「どうしたの? だれか探してるの?」

振り返ったその先にいたのは今まで探していたルチアだった。3人はルチアの美しさに見とれてしまう。

「アイル? 私、変?」

「え、いや。似合つてる。きれいだよ」

そう言われたルチアの頬は薄紅色に染まった。

アイルに似合つてゐよと言われたルチアは頬を薄紅色に染めて微笑む。

「ありがと…。3人もどつても似合つてゐよ」

話しかけようとしたアイルをさえぎるよりにして城下町に住む貴族のお嬢様たちが押し寄せてきた。

「アイル様つ、おかえりなさいませ！今宵は私と踊つてくださいますわよね？」

「いいえつ、アイル様は私と踊つてくださるんでしょう？」

ルチアはふつと笑つてバルコニーのほうへ行つてしまつた。

その、様子を見たクラウスとレイはため息をつく。

キレたかな…？

「アイルはモテモテっすねー」

「そうちだなあ…。俺はもう恋人がいるつてのが知れ渡つてゐからなあ…」

そう言つてクラウスはルチアが行つたほうを見る。

「様子見に行つてやつたほうがいいんじゃないいか？」

レイはため息をついてうなずいた。

「うん、ちょっと行つてくるよ」

そしてぼそつとつぶやいた。

「あんまり泣かしたばつかしてるとこつちまひだ…」

「ん？なんか言つたか？」

「なんでもない」

踵を返し、バルコニーの方へと走つて行つてしまつた。

その後ろ姿をみてクラウスは首をかしげる。

「なんだ…？」

「アイルつたら『テレレレレレ』ちやつて…。ほんつとバツカみたい…」

溜息をつきながら手すりへと突つ伏した。

「あれつくらい積極的にならなきやだめなのかなあ……」

「いや……。それはそれでちょっと引くぞ……」

ぱっと振り返るとレイが苦笑交じりに立っている。

そして、ルチアの方へ手を差し出した。

「つたぐ、あいつもしじうがねえよなあ……」

ルチアは手をとり立ち上がった。

中からはダンスが始まったのであらう音楽が聞こえてくる。

「一曲お願ひできますか？お嬢様」

クスツとルチアは苦笑した。

「いいけど……。私踊れないよ？」

「そこは俺が……いや私がリードしますよ」

「ふふつ。お願ひします」

一方そのころアイルは貴族の娘たちにつきぎりしていた。

ルチアはどつか行つちまうし……。もう、勘弁してくれ……！

その様子を遠くから腕を組んで見ていた、クラウスにイヴが声をかけた。

「アイル兄様はどこですか？」

「これはこれは姫様……」

「そんな他人行儀でなくともよくつてよ……。きよ……」

頬赤らめるイヴにクラウスは首をかしげてイヴの顔を覗き込む。

「きよ？」

「兄妹でしょ」

「そうだな……。アイルならあそこで貴族の娘たちに囲まれてるだぞ」

そう言つてアイルのいる方向を指差した。

イヴは軽くため息をついた。

「でしようね……。ルチア様はあちらでレイというかたと踊つてらしたものの」

「まったく……、女心が分からぬいやつで困るな」

くつくつと笑うクラウスを尻目に、イヴは頬を膨らまし腕を組んだ。
「笑い」とじゃあございませんわ！！ルチア様がどんな気持ちでいるかも知らないで…」

「しかし、これはこれでいいんじゃないかな？」

イヴはクラウスを見上げて首をかしげる。

「ここで、ルチアがポツとでてきてアイルと踊つてみろ…。ねたみの対象になるだろうなあ…」

「そう言われてみれば…。しかたのないことですね」

イヴは視線をアイルの方へもどしてからバルコニーの方へとめぐらした。

そして溜息を一つ落とした。

「悩みがつかないな…」

「そうですわね…」

クラウスはそつと目を閉じてふつと笑った。

「だがそれも楽しみのひとつだろ？」

「悩みが？」

「人間……悩みが無くなったらお終いだぞ」

そこへ、娘たちから逃げてきたアイルがやつてきた。

アイルは息を切らし肩で息をしている。

「助かつたあ…。ルチアは？」

「知らない。自分で探せば？」

イヴとクラウス2人に言われてしまつたアイルはぽかんとした表情をうかべ、大きなため息を一つ落とした。

「そりゃないだろお」

クラウスはイルがため息をつくのを見た後、入口のほうが騒がしいのに気がついた。

「なんだ…？ なんでこんなに騒がしいんだ？」

イヴがそばにきた男性に何があつたを訪ねた。

「なんか、教団の騎士が来てるみたいですよ」

「教団の？」

イヴは首をかしげて人だかりの方へ歩み寄っていく。

そこへ騒ぎを聞きつけた王妃が急いできた様子で肩で息をしながらやってきた。

「イヴ！ なんですか？ この騒ぎは…」

その時ぱつと人だかりが割れ、鎧をきた騎士が近づいてきた。

「『機嫌麗しゆう、王妃様。お騒がせしてしまつてもうしわけございません』

王妃は鎧をとらない騎士たちを見て眉を寄せた。

「鎧を取るのが礼儀ではなくって？」

「すいません。それはかないませんね…。こちらに巫女様が来ているはずです。呼んでいただけません…」

騎士が王妃に問いかけるよりも早くどこからか騎士めがけてナイフが飛んできた。

ナイフが刺さった騎士は断末魔をあげてその場に倒れたかと思つと灰となつて消える。

それを見た王妃やその周りにいた人たちは眼を見開いた。

「王妃様！ その人たちは人間じゃありません！」

「巫女様…？」

ルチアは王妃と騎士たちの間に入る。

「何用で来たんです？ 魔物の方々…」

ルチアがキッと睨みつけると騎士は笑い始めた。

「さすが巫女だな。我らが魔物だと見破るとは…。構える必要はありませんよ、あなたたちが大人しくしていいんならね。関係のない人たちには危害は加えません」

いつの間にかに騎士たちを取り囲むように武器を構えて立っている、アイルたちをルチアは制した。

「3人ともやめて、ここで被害を出すわけにはいかないわ」

「巫女は自分の立場を分かつていいようだ。…单刀直入に言おう。我らにひとりでついてきてほしい」

「なつ、てめえ何言って！」

「アイル！！」

アイルはルチアに制されて舌打ちをする。

「嫌だと言つたら…？」

「その時は、こちらで捕らえていたる聖獣を殺させていただきます」

聖獣という単語を聞いたルチアは眼を見開いた。

「聖獣…を？そんなこと…」

「できるんですよ。さあ、どうしますか？」

「NOとは言えないみたいね…。わかった、行きます。その前に着替えてきていい？」

騎士はうなづいた。

「ええ、いいですよ。武器も用意していただいて結構ですよ

「ありがとうございます」

王妃ははつとなつて周りにいる召使に命令する。

「すぐに着替えと武器の用意をお願い」

「かしこまりました」

召使は一礼をして走つて去つていく。

「では、ここで待つてますからどうぞ」

ルチアも一礼をして客間へと向かつた、それをイヴが追つた。

「お姉さ…巫女様！なんで、あいつらの言つことなんか聞くんです

か！？」

「聖獣が死ねば…祈りを捧げられない…。世界を浄化できなくなってしまうの」

「浄化できない…」

ルチアはくるつと振り返り苦笑いを浮かべる。

「イヴ…、そんな顔しないで。私は大丈夫だから、ちゃんと帰つてくるから」

そしてそつとイヴを抱きしめる。

「御姉様…。絶対…絶対ですわよ」

「うん、わかった。じゃあ、アイルたちと待つていてくれるかな?」

「わかりましたわ」

イヴが広間へ戻るとアイルが腕を掴んできた。

「ルチアはなんて!?」

「…大丈夫だから……って…。」

「ルチア…」

数分後支度を済ませたルチアがやつてきた。

「お待たせしてしまって、すいません…」

「いえ、かまいませんよ。いきなり来たこちらが悪いんですから」

踵を返し行こうとするルチアの腕をアイルはつかもうとしたが…

「ルチ…」

その手は振り返ったルチアによつて止められた。

振り返つたルチアはさみしそうに微笑み、その頬を一筋、涙がつたつた。

アイルの手をつかむその手は震えている。

「ルチア…?」

「心配してくれるのはうれしいけど…。それはとっても悲しいよ…」

ルチアは手を離し行つてしまつた。

「どういうことだよ!!ルチアアア!!」

アイルはその場に崩れ、床を拳で叩く。イヴは顔を手で覆つた。

王妃はため息をつき、アイルの前にしゃがみこんだ。

「母上…？」

パンと広間に音が響いた。

アイルは茫然として母親に叩かれた頬を抑える。

「あなたは…あの子のこと何にもわかつてないわ…」

そしてすくつと立つと密にはおわび、召使たちには的確な指示をし始めた。

イヴも召使に連れられ部屋へ戻ってしまった。

残されたアイルはただ呆然とするだけだった。

「アイル…」

「なんだよ…」

クラウスはため息をつく。

「母上の言つとおりだ。お前はルチアのことは何にも分かつていない。お前は頭を冷やしてきなさい」

そう冷たく言われたアイルはふらふらとバルコニーへと向かった。

「まったく、アイルは…。過保護な保護者かつての」

レイは首をすくめ、拳を握る。

「俺だつて何にもできない自分に腹立たしいよ」

「そうだな、それはみんな同じことだ」

アイルは夜空を見上げた。

見上げた先にある月は不気味に輝いていた。

暗い夜道を魔物に囲まれてルチアは歩いていた。

見上げた先にある月は道を照らすように青白く輝いている。ルチアはさつきから疑問に感じていたことを口にする。

「あの……」

前を歩いている鎧をきた魔物が返事をした。

「なんですか？」

「なぜ…私に武器を持たせたんですか？もしかしたら…」あなた達を殺して逃げるかも知れないんですよ？」

魔物は少し黙つてから夜空を見上げ、口を開く。

「そのような事をする方ではないと思つたからです…」

そして、立ち止まって振り返った。

鎧で表情は見えないがきっと笑っているのだろうとルチアになぜだか分かつた。

「あなたは魔物にとつても希望なんですよ」

「？」

それつきり魔物は黙つてしまつた。

城下町の郊外にきれいな教会がそびえ建つている。

魔物は正面の扉を開けて中へと促した。

言われたとおりに中へ入り、正面を見てルチアは感嘆の息をもらす。

「きれい…」

目の前には月明かりに照らされ宝石のように輝くステンドガラスがある。

魔物は奥へと向かい、ルチアもそれについて行く。

そして、立ち入り禁止と書いてある扉の前まで行き振り向いた。

「こちらです…。この扉をくぐり、通路を通つた先に神殿があります」

「…? なんで? 人と聖獣は相いれないもの…。だから、神殿は人

里から離れた所にあると聞いたことがあります

魔物は小さく首を振り中へと入る。

「昔は…人間の崇める対象は聖獣だったのです。うんと昔ですがね

…

そして、立ち止まり振り返る。

長い間立入禁止とされていた通路は荒れ放題で長い時間をおもわせる。

「少し…長くなりますが、昔話を聞いていただけますか？」

「はあ…。かまいませんが」

「では…

昔…この巫女の制度ができる前の話です。

その当時は天人は下界には干渉することはありませんでした。

そのせいもあって人間と獣人はもちろん、魔物も人間たちと同じよう街中で生活していたのです。

そして均衡を保っていたのが聖獣でした。

聖獣が神そのものだつたのです。でも、突然その均衡は崩れました。天人が干渉してきたことで聖獣は人里から離れ、魔物は人間たちの敵となつたんです。

唯一こここの神殿だけが昔と変わらない場所形で残つているんですよ

「そんな…ひどい…」

「そうですね…」

また再び沈黙が訪れる。

長い通路を通り、階段で下りて今度は地下通路を通つてやつとのことで神殿へとついた。

聖獣がいる間へと案内されてしまふと正面には同じくらいの年齢だろうか…茶髪の少年が聖獣の上に座つてゐる。

魔物が一礼するとボーグラノの声で答えた。

「ごくろい。へえ…、こいつが今回の…。結構美人じゃん」

少年は聖獣からおりてルチアへと近づく、ルチアは威圧感に後ずさつた。

「はじめまして、巫女サマ」

「あ…、はじめまして」

「僕の名前はシリウス。天人です」

天人という言葉を聞いてルチアは目を見開いた。

「天人…。あ、だから聖獣…を…？」

「そうだよ」

「なんで私をここへ…？」

シリウスはどんどんルチアへと近づいた。

「僕が会いたかったからさ…。ルチア」

シリウスがにこっと笑ったかと思つたらルチアは急に気が遠くなるのを感じた。

崩れるように倒れこむルチアをシリウスが支えた。

「おつと…。この子には僕の能力は強すぎたかなあ…。体が弱いんだつたよね」

「そうみたです」

「ふうん。僕は一回下がるよ…。聖獣の監視よろしくね」

「はい、かしこまりました」

シリウスはルチアを抱きかかえて踵を返した。

『いいですか、みなさん。天人の皆様には特別な能力ともう一つ特徴があります。それは髪が金髪なのです』

ルチアが目覚めると見知らぬ部屋のベットの上だった。

「やあ、目が覚めた?」

はつと気付くとシリウスも自分も裸であった。

「きやつ、なんで裸!?」

「大丈夫何もしてないから」

「あ…」

思わずルチアはさらさらしたシリウスの髪へと手を伸ばし触れた。

シリウスは一瞬驚いた表情になつたが、すぐににこりとした

「ああ、さつきは茶髪だったからね」「きれい…ですね」

「君もきれいな髪だよ」

ルチアはポツと顔を赤くした
「ありがとうございます。ひやつ」

体をビクンと震わした。

シリウスが体を指でなぞったからだ。

「は…あつ」

「体もとてもきれいだ」

ルチアはさすがに抵抗したがそれが叶うことはなかつた。

「い…やあつ。！！」

「だめだよ、ルチア」

「体が…体が…」

シリウスはルチアの頬に触れ、微笑みを浮かべる。

「いいことを教えてあげようか。天人の声は巫女を縛るんだ」

「そ…んな。ああつ」

シリウスはルチアの首筋、豊かな乳房にキスを落としていった

「ねえ、ルチア。僕も君と一緒にいたいな」

「はい…。いいですよ…」

体がいうことをきかない

「僕が天人だつていうのはほかの人には内緒だよ」

「はい…」

シリウスはルチアから体を離し、服をルチアへと投げた。

「じゃあ、祈りをすまして帰ろつか」

「イル、少し落ち着いたらどうだ…」

うるうると熊のよつに徘徊するイルを見かねた国王が声をかけた。

「しかし…」

そこへ扉の叩く音がした。

「誰だ？入りなさい」

メイドが息を切らしてはいつてきた。

「失礼します！巫女様が！巫女様がお帰りになられました」
バルコニーの手すりに肘をついて外を眺めていたイヴがパッと顔を輝かせて振り向いた。

「それで！けがとかは？」

「ないようですが、大変お疲れの様子で客間へと案内しておきました」

「ルチア！！」

アイルは勢いよく扉を開けた。

ルチアはベッドの上に座っている見知らぬ男の腕の中で眠っている。

「お前誰だ？」

「はじめまして、シリウスと言います。これから、一緒に旅に同行することになりました。よろしく」

「そんなの、聞いてねえぞ」

殺気立っているアイルにシリウスはクスッと笑った。

「巫女様…。ルチアからはもう許可を得ましたからそれよりも…と話を続けた。

「あなたは思いやりのない方ですね。ルチアは疲れて眠っていると…」

ふうとため息をついてルチアの頬に触れた。

シリウスの言葉にアイルはむつとする。

「てめえは失礼なやつだな」

そう吐き捨てる部屋から出て行つた。

そのあとを追おつとしたレイは振り返りざまにシリウスの薄気味悪い微笑みを見る。

クラウスは扉をたたく音がしたので読んでいた本から顔をあげる。

「入つていいぞ」

扉から顔をのぞかせたのはレイであった。

失礼しまーすと言つて入つてくるレイに椅子を用意する。

「どうした？こんな夜遅くに」

「いや、部屋にいたらイルが愚痴を言いに来そ�で…」

「そりか…シリウスのこともあるんだね？」

レイは用意された椅子に座つて苦笑した。

「お察しの通りで。あいつ、ただもんじゃねーと思つんだ

「確かに…。気をつけないといけないな」

クラウスの言葉にレイはうなずく。

「ああ…。問題は猪突猛進な王子様なんだよな」

「すまんな、猪突猛進な弟で」

クラウスはため息交じりに苦笑する。

「よく、観察しないと…」

レイはすうつと田を細め不気味に輝く月を見た。

No.15(前書き)

R15 ものです。
苦手な方は、ご注意ください。

目が覚めたルチアはバルコニーに出て月を見上げて溜息をつく。シリウスが触れ、口付けをした場所にふれる。

よかつた。跡はないみたい。

ルチアは背後から人が近づいてくるのに全く気づかない。ぐいっと後ろから抱き締める腕があった。

「！」

ゆっくりと振り向くと唇を奪われる。

黒い髪だったのすぐにアイルだと気づく。

「んつ…。はあ…アイル？どうし…んう…」

アイルはさらに深い口付けをする。

「はあ…。アイル？」

アイルは黙つたままルチアをベッドまでつれて押し倒した。

「アイル、やだ…怖いよ…どうしちゃったの？」

ルチアが涙を浮かべるとアイルは首元へ頭を押し付ける。

「もう、今夜はがまんできない…」

「え？…やあ…」

あっけにとられているルチアをよそになれた手つきでネグリジェをするりと脱がした。

「アイルウつ。恥ずかしいよ」

そんなルチアを無視して様々などこに口づけをする。

それはルチアを快感にさせるのに適したものであった。

「ああ…。は…あん…や…あ…」

アイルが秘部を守る下着へと手を伸ばすのをルチアは気づかない。

そこへ振れることで初めて気づき、体を震わす。
アイルはそれを交わして侵入する。またルチアが体をビクンと震わす。

「あ…」

そちらに気を取られて、いのつむにアイルは豊かな乳房にある小さな突起を舌で転がし含む。

「い……やあっ……。は……あっ」

身をよじらせて逃れようとするルチアを力で抑え込む。

「アイルっ。やめてえ……。いきなり……なんでこんな……」

ルチアは喘ぎながらアイルに必死に抗議する。

やつとアイルが体を起して口を開いた。

「言つたろ……？我慢できないって。ルチアは俺のこと嫌いか？」

悲痛そうな顔で見詰められたルチアはアイルに抱きつく。

一人を夜風が包み込む。

「違う……違うの。ただ、驚いただけだから……。ごめんね」

アイルを見つめるルチアの顔は、体は月明かりを受けてより一層美しさが増していた。

それを見て激しい衝動に駆られたアイルは「ごめん」とつぶやいてベッドに押し倒してキスをする。

「ごめん……。ほんとに我慢できないんだ」

そう言つてアイルは体を重ねた。

その瞬間ルチアの体を熱いものが駆け巡った。

風の冷たさに目を開けると外はまだ暗かった。

優しく包み込むアイルの腕から抜けてルチアは体をゆっくりと起こした。

そのままタオルを探し出して部屋についているシャワールームへと向かった。

汗を落としシャワーを止めてルチアはふうと息をつく。

まとわりつく濡れた髪をまとめると、体を拭いてシャワールームから出てネグリジェを着た。

そしてそうとベッドへと近づいてアイルに布団を掛ける。アイルの髪へと優しく触れた。

「ごめんね。アイル……」

こんなにもあなたを苦しめてたなんて知らなかつた…
ルチアの流した涙がイルの頬へと落ちた。

明るくなつてから目を覚ましたイルはそばにルチアがいないことに気づく。

「ルチア？」

ルチアは服に着替えてバルコニーで祈りを捧げていた。

起き上つたイル気づいたルチアは振り向いて笑顔を見せた。

「おはよう、イル」

「ヒの祈りも済ませたみたいだし。そろそろ行こうか？」

荷造りしながらクラウスがルチアに問いかけた。

ルチアが答える前にシリウスが口をはさむ。

「そうだね。先を急げ」

「俺はルチアに聞いたんだが…」

じろりとシリウスをにらみつけるクラウスをルチアがなだめた。

「クラウスさん。落ち着いて…」

横からアイルも口出しをした。

「俺も気にいらねえな…。お前の態度」

「もうっ、みんな仲良くしてよー！」

ルチアが怒鳴ると4人はルチアのほうを向いた。

レイはうなずく。

「俺も同感…。これから一緒に旅するんでしょう？ こんなんでどうするの？」

そう言われてしまってアイルは黙ってしまう。

「そうだな…。行こう…」

城門のところでイヴが見送ってくれた。

「お兄様、いつてらつしゃいませ。ルチアお姉さまに迷惑をかけないでくださいね」

「わかってるよ。お前こそ父上と母上を頼んだぞ」

「はい、わかっていますわ。では、ルチアお姉さま、がんばってくださいさいね」

ルチアは小さくうなずきほほ笑んだ。

「うん、ありがとう」

その様子を少し離れたところからシリウスが眺める。

おかしい…。どうして笑える？

「次はどこへ行くんだ？」

レイがルチアに問いかけると、ルチアは首を振る。

「それが…わからないの」

「わからない！？どうして…」

「普通、聖獣がしめしてくれるはずなんだけど…」

ルチアはうつむいてしまう。

助け舟を出すようにシリウスが続けた。

「次はここから北へ歩いて行つたところにあるよ。確か…なんとかつていう貴族の領地にあつたはずだ」

レイは首をかしげた。

「北？俺のところじゃねえな。なんて言つたけ…確か…クラウディイとかいう貴族だつたよ…」

「クラウディイ…？」

ルチアがつぶやくとシリウスがレイに続けた。

「確かに、夫人の実家は大きい商家だつたな」

「うん、その実家との縁で少しだけ交流があるよ」

「じゃあ、領地へは楽に入れる？」

今度はシリウスがレイに尋ねる

「うん、大丈夫だと思つよ。そつか…領地に入れなきゃ始まらないもんな」

あたりは暗くなってきたが町らしきものなどここにも見当たらなかつた。

「やっぱ、一日じゃ着けないか」

レイはため息をつきながら、野営をする場所を探していた。

「雲行きも怪しいから、屋根を作れる場所を探さなきや」

ルチアは夜空を仰ぐ。

空には星のひとつ、月すら見えなかつた。

「あ、あそこがいいんじゃないか？」

イルが指した場所は小高い木が立つ、泉のそばだつた。

「あそこなら魔法で屋根が作れそう」

ルチアが同意する。

周りに気づかれないようにシリウスがルチアに近寄る。

「あとで少し話がある…。」

「うん…」

ひと段落ついた頃に雨がぽつぽつと降ってきた。

ルチアはみんなに気づかれないように林の中へと入る。

「何の用ですか？」

ルチアが発した声の先にある暗闇から出てきたのはシリウスだった。

「やつと、二人きりで話せる」

そうつぶやいたときにはルチアの背後について後ろから抱き締めた。そしてその右手でルチアの胸を愛撫する。

「あつ…。いやあつ…」

ルチアの抵抗はきかなく、左手がスカートの中へと侵入する。

「んつ…」

「ねえ、あの男と関係をもつたでしょ？僕の許しもなし…」

「あなたにはあつ…何の権限…があつて」

「何の権限？」

ぐいっと乱暴にルチアの顔をつかみ自分の方へ向ける。

ルチアの瞳は快樂と痛みと恐怖で涙目になっている。

「巫女は天人の言つことをきくものだよ？わかってるよね？」

「…」

「僕が同行するのを許した時点で君に自由はないんだって理解して るよね？」

小さくうなずいたルチアの体を一度解放して、木に体を押し付けた。 そして柔らかい唇に口づけをする。

「じゃあ、僕は先に戻つてるから…。自分の置かれている立場をよ く理解しておいてね」

ルチアはその場に力が抜けたように座り込む。

「もう…いやだ…」

「どうして…。こんなに自分を追い込まなきゃいけないの？笑うの

は疲れたよ

うずくまつたルチアの体を冷たい雨が濡らした。

気がつくとルチアは花畠の中で座り込んでいた、そこへ自分よりすこし金が濃いプラチナブロンドの優しそうできれいな女性があらわれた。

「あなたは…？」

女性はほほ笑んで首を振り、ルチアをやさしく抱きしめた。

「どうか、どうか私の望みをかなえてちょうだい…。この世界をあるべき姿にもどして…」

「お願いよ。可愛い…

そこでルチアの意識が途切れる

可愛い…愛おしい私の子…

「…！ルチア！大丈夫か？」

目を開けるとそこには心配そうな表情を浮かべているアイルの顔があつた。

「アイル…？」

「よかつた。戻ってこないから心配したんだぞ」

あたりを見回すとクラウスとレイも安堵した表情で立っていた。空には青空が広がっている。

「熱は…なさそうだな。いけるか？ルチア」

「え？あ、うん。私は大丈夫」

無理に笑つてを見せた、作り笑いになつたのはいつからだろ？…？

巫女は祈りを捧げていくと人に間としての感情が消えていく…

そう何かで読んだのをルチアは思い出した

「この体を女神に差し出すために、余計な感情はいらないのだと

昨日の天気が嘘のように晴れていって、暖かい日差しが照らす。
お風呂になつてやつと一行は都市についた。

「ここが、クラウディつていう都市だ。俺は入れるように話してくれるからみんなはここで待つてくれ」

そう言つてレイは4人から離れていった。

しばらく経つとレイが戻つてきて町中へと入る。

「ルチア、ここは大きな港があるんだ。珍しいものもいっぱいあるんだよ。あとで見に行かないか？」

朝から元気のないルチアを心配してレイが市内観光に誘つ。ルチアは小さくうなずく。

「よしつ。とりあえず宿を探そつ」

その時、アイルにぶつかつた少女がいた。

「あ、すいません。大丈夫ですか」

よろけた少女の体をアイルが支える。

「ええ、平気ですわ……！」

はつとしたように少女はアイルを見つめ、頬を赤く染める。アイルは首をかしげる。

「お嬢様ー！」

少女の教育係であろう女性が走ってきた。

「やつと見つけましたよ。クラウディ家の娘である方が教養のないようでは困るんですよ。さ、かえりましょう」

少女はため息をついてアイルの方へ向く。

「わたくしの名前はココナ・ド・クラウディと申しますの。あなた方は旅人のようですね。」

「はあ……」

「助けていただきたいお礼もしたいですし、今夜は屋敷に泊まつてくれませんか？」

「いいんですか？」

「ええ。では、まいりましょ！」

屋敷の応接間に案内され、主人夫妻が入ってきた。

「これはうちの娘がご迷惑を……！？」レイ君ではないか。久しいですな」

「お久しぶりです。……本当にお世話になってしまってもよろしいのですか？」

主人は笑つてうなずく。その笑顔からは人のよさがにじみ出でていた。「もどろんですとも。すぐに用意させましょ。ああ、私はアーノルドと申します。こちらは妻の……」

「カタリナです。……！？」

カタリナはルチアに目を止める。明らかに驚いてる様子を隠せないようだつた。

「カタリナ？どうかしたか……？」

アーノルドが心配そうに顔を覗き込むとカタリナは首を横に振つた。
「いえ……なんでもありません」
「そうか……では、みなさんゆっくりしていつてください」
「ありがとうございます」

5人は頭を下げた。

部屋を出るとレイはルチアを促す。

「じゃあ、ルチア。行こうか」

「うん、図書館があつたらそこにも行きたい」
「わかった。じゃあ……」

屋敷をでて町中へと歩いてくるルチアの背中をカタリナは見つめた。
あとで確かめなくては……

だいぶ間が開いてしまいました。
ごめんなさい…

屋敷を出て通りを歩いているとレイがぽつりとつぶやいた。

「ルチアってさあ……。孤児院で暮らしてたんだよな？」

「うん、院長先生が亡くなつて、学園に入学するまではね」

ルチアは急にどうしたの?と首をかしげた。

「いや……。カタリナ夫人がお前を見て驚いていたなと思つて……」

クラウスは確かにどうなずく。

「フランから両親について何も聞かされてないのか?」

そう問われてルチアは目を伏せる。

「うーん……、お父さんのことはちょっとだけ覚えてる。私が物心ついたぐらいの時に自殺しちゃつたんだよね。お母さんのことは何も

……」

そこへ、ココナがアイルの後を追いかけてやつてきた。

「旅人の方! わたくしが町をご案内いたしますわ」

「ココナ嬢、勉強は?」

レイが尋ねるとココナは人差し指を唇の前に立てる。

「逃げてきましたの」

にっこりと笑う笑顔にルチアは胸騒ぎを覚える。

そしてアイルに向けて話しかけた。

「ねえ、私別行動でいいかな? 一人でも平気だから」

「じゃあ、俺が案内するよ。約束したしな? いいだろ?」

レイはにこっと笑つてルチアの手を引いた。

「ほら、行こうぜ」

「じゃ、俺も……」

アイルが伸ばした手をレイが振り払う。

「おまえはダメ。あ、もちろんシリウスもね。4人で楽しんできて

よ

クラウスは目でうなづき、3人を促す。

「さあ、行くぞ」

それは城での夜のことだった。

「あ、そうだ今度タイミング見つけて俺とルチアを一人っきりにしてくんない？」

クラウスはレイの突然の申し出に疑いの目を向けた。

「どういうつもりだ？」

レイはへらつと笑つて分厚いノートを取り出して田の前でひらひらと振つた。

「実はさ、俺ルチアの監視の任務もあつてついてきたんだよねー」

クラウスににらまれてレイは肩をすくめる。

「じょーだんだって。ま、任務を受けてたのは事実だけど、俺はいつもをじじいどもの実験台にするつもりはないわ」

そこでレイは真剣な表情をして、続ける。

「ただで…、ちょっと心配なんだ。どこまで感情が失われるのかとか…。シリウスのことも何か聞き出せるかもしれないし」

「そう…だな。なんだか、もどかしいものだな…」

レイは首をかしげる。

「？」

「世界と人一人の命を天秤にかけるものではないが…。あの子に滅ぶ道をわかつて護衛をしているのがな…。そう思わないか？」

「確かに。なんとかしてやれないのかな」

「レイ? 大丈夫?」

ルチアに話しかけられてレイははつと我に帰つた。

「ん、ああ…。なあ、この先でかい噴水がある、広場があるんだ。そこに行つてみないか?」

「うん。ねえ、レイはこここの領主さまとはどういう関係?」

レイはうへんと頭をかいた。

「ものすごお…………く遠い親戚？」

「ふうん。ねえ、なんか話があるから一人つきりになつたの？」

いきなり核心をついたルチアの質問にレイは肩をすくめ、噴水のそばにあるベンチを示した。

「あいかわらず、勘がいいねえ。とりあえず、すわるーぜ」

広場には子供たちの遊ぶ声が響いている。

「レイは…私が最終的にはどんな風になっちゃうかしつてるんだよね？」

「…まあな。協会のジジイもからきかされてたし。この際行っちゃうけど、俺はお前の監視を命ぜられてついてきたんだ。もちろん、俺にはそんなつもりはないけど」

ルチアにじつと見詰められた、レイはふいと目をそらす。

「そりなんだ…。私ね最近、ふつと感情がなくなるの。樂しつて悲しつて何？みたいな」

レイは静かにルチアの言葉を聞いている。

「笑い方がわかんないの。…人じやなくなるのがすごい怖い。日に日に恐怖だけが募つていくの…。でもね…」

「でも？」

「世界が平和になるんだつたら…。みんなのためになるんだつたらつて思うと耐えられるんだ」

ルチアは小さな微笑みを浮かべる、レイは唇をかんだ。

「そ…うか。なあ、シリウスは一体何者なんだ？」

ルチアははつと目を見張る。

「それは…。言えない、言えないよ」

急にあわてるルチアにレイはとまどひ。

「口止めされてるとか？」

「違う…、言えないようになつてるの」

レイはルチアを抱き寄せる。ルチアは突然のレイの行動に驚きを隠せない。

「レ…イ？」

レイは抱きしめる腕に力をいれて、ルチアの肩に顔をうずめる。
「アイルはもちろん、俺だつてクラウスだつてお前の力になりたい
んだ。だから、気にしないでなんでも言えよ？」

ルチアはきゅっとレイの服をつかむ。

「全部全部受け止めてやるから…」

「レイ…、ありがと」

「レイ…」

ルチアはレイの袖をぎゅっと掴んで、目を閉じる。

「レイ、あつたかい…。」ういう感覺もいつか消えていっちゃんの
かな?」

レイは返事をせずにもつと力をこめて抱きしめる。
どこかに行つてしまわないように…

「怖いよ…。」

「そんなことには絶対させない…。世界もお前も両方救える道を絶
対見つけやるから」

レイは一度ルチアの体を離して、ルチアの瞳をじっと見つめる。

「だから、そんな悲しいこと言つなよ」

ルチアはレイの頬に触れて、クスッとほほ笑んだ。

「泣いてくれるの? レイは優しいね」

「ルチア…」

しばらく二人は何をするわけでも、話すわけでもなくただベンチに
座っていた。

噴水の水しぶきに太陽の口差しがあたつて、宝石のように輝いている

「さつきは格好悪いところ見せちゃつたな…」

バツが悪そうにレイが沈黙を破った。

「ううん、格好悪いよ? だつて、私のために流してくれた涙だ
もの」

ルチアはほほ笑んだ、その笑顔がレイにはとても痛々しく見える。

「笑い方…」

「え?」

「笑い方わからなくなっちゃつたんだろう? 無理して笑わなくていい
いぞ?」

そう言って心配そうに顔を覗き込んだ、大丈夫だよとルチアは言つ。

「大丈夫だよ。無理してなんかないよ?」

「そうか…。なら、いいけどな」

そこへカタリナ夫人がやつてきた。

「どうしました? ココナ嬢ならここにはいませんよ?」

「いえ、私が用があるのはココナではないのよ。私が用があるのはあなたよ」

そう言つてカタリナはルチアの方へ向き直る。

「なぜ、私に…?」

「あなたのフルネームを教えてちょうだい」
ルチアはレイと顔を見合せて首をかしげた。

「私の名前は…」

ルチアが言いかけた時、ココナの声がした。

「お母様!? 私を探しに来たの?」

「ええ、それもありますけど…。ココナちゃんと勉強しなくては、
立派な巫女様になれませんよ?」

アイルは怪訝そうにつぶやいた。

「巫女様…? とはどういうことですか?」

「信託では私の母は世界を救済する巫女を産むのだといわれていた
んです。ですから、私は巫女になるべき人間なんです」

「そうか…、ここは巫女が旅にでたという情報が入つてないんだな。
あれ…まさか…」

4人は顔を見合わせる。

「どうかしましたか?…あ、そう言えば私まだ皆様のお名前を聞い
ていませんでしたね」

「それは失礼いたしました。んじゃあ、ルチアからどーぞ」
レイに促されルチアは口を開く。

「ルチア・フォン・エルウッドです」

その瞬間明らかにカタリナの顔色が変わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8520c/>

Full Moon

2010年10月28日08時15分発行